

WESLEY'S  
STANDARD SERMONS  
TRANSLATED  
BY  
S. H. WAINWRIGHT, M. D.  
SAKURAI SEIMEI  
H. ISHINUMA, F. E. D.  
VOL. I

ウェスレー氏説教集 上巻

020264-000-9

特18-822

ウェスレー氏説教集 上巻

エス・エイチ・ウエインライト/等訳

M31

ABI-0069



WESLEY'S  
STANDARD SERMONS,  
TRANSLATED

BY  
S. H. WAINRIGHT M. D.,  
SAKURAI SEIMEI.  
HISHINUMA HEIJI.

VOL. I.  
1898.

明治三十一年七月出版

Wesley's Standard Sermons  
聖書大説教集上巻

エス、エイチ、ウエインライト  
櫻井 成 明 共 譯  
豪 沼 平 治

特 18  
822



東洋書院  
說文解字  
卷一



WESLEY'S  
**Standard Sermons,**

TRANSLATED

BY

S. H. WAINRIGHT M. D.,

SAKURAI SEIMEI,

HISHINUMA HEIJI.

**VOL. 1.**

1898.

WESLEY'S  
STANDARD  
SERMONS  
VOL. 1  
1898

緒言

本書にはウエスレーの標準説教二十六を蒐集せり尙餘す所の二十六は逐而之れが翻譯に従事せんとす説教第二、第三、第四、第七、第八は菱沼平治君と共に之を譯し其餘は櫻井成明君と共にせり本書は主として教理を世に知らしめんことを勉めたれば譯語往々にして穩當ならざる所あるべしと雖も讀者之を諒し其意のある所を玩味せば此書によりて益する所蓋し少々ならざるべし

西曆千八百九十八年六月

エス、エツチ、ウエイ、ン、ライ、ト

## 序 文

一此の説教集は予の八九年以前より公衆に向ひて爲せし説教のすべての主意を含有し其の中に於て全く教理を説き盡くしたるものなれば讀者能く之を反復熟讀せば明に予が宗教の要素として其の信ずる所と其の教ふる所とを知ると得べし

二讀者或は之を讀みて満足せざる者あらんか從來此の説教文は教理を示すに之を敷衍し又は修飾して之を論ずるの時間なきを以て是等の事は一切爲さず然れども其の目的は予が常に懷抱する所の主旨即通俗の人々にして學術上の智識なきも能く現在と未來との

幸福に取りて必用なる眞理を判断し悟り得る常識力あるに訴へて此の説教を爲せり故に彼の批評的の讀者に在りては豫め是等の所を宜しく了察すべし

三質樸なる人々の爲に質樸の眞理を述ぶることは予が目的なり故に殊更にすべて哲學上の理論又は複雑なる理窟或は學者的の言(原語を除く外)を用ゐず若し夫れ普通に用ゐざる神學的の詞即一般の人に悟り難き詞は素より之を避けたりされども予の不注意にして此等に關する詞なしともいふべからず讀者之を恕せよ

四又予が目的は或意味によれば從來書物上にて讀みた

るすべての事を忘れ古今の著者の書物(聖書の外)はすべて讀みしことなき如く心を空虚にせり是故に己の思想を明に見はすことを得べくして他人の思想によりて己の思想の湧出を妨げらるることなし故に自ら眞理を探究するにも亦他人に福音其のまゝの眞理を傳達するにも己の心の上に偏見偏僻又は他人の思想あること少なきことを信ず

五誠實にして理に敏き人の前には予は己が心裏に潜める思想を語るを憚らざるなり予は思へらく人生は恰も矢の空を飛び行くが如く忽にして過ぎ行くものなりまた人は神より來れる靈にして譬へば深淵に臨ん

で翱翔するが如く忽ち常住不變の裡に没して復た見  
る可らざるに至ると故に予は天に到るの途即如何に  
して安全に樂しき彼岸に着すべき乎の一事を知らん  
と欲するの念切なり神は實に此途を教へんが爲めに  
天より降り給へり而して其教を書冊に記し給へり  
われは其書を得んと欲す而して價の高下は敢て問ふ  
所にあらず嗟予は既に其書を有す天に到るの途これ  
に盡せり願くば唯此書のみを讀むものたらん試に世  
俗の擾亂を避け獨坐して此書に對せば只神のみ予と  
共に在り天に到るの途を教へ給ふ若し此書を讀むに  
當り意義晦澁にして理解し難き所あらば光の父に我

が心を捧げ而して曰はん爾曹の中も智慧足らざる  
ものあらば神に求めよとは爾の聖言みことばにあらざる乎爾  
は答むることなく惜ことなくして與へ給ふべし爾ま  
たいひ給はく人も我を遣はす者の旨に従はゞ此の  
教の神より出づるを知るべし嗟神よ我は爾に従ふを  
願ふ希くは爾心を我に示し給へ然らば我は聖言を研  
究して靈みたまの言を以て靈の情こころに當つるを得ん我は吾が  
爲し能ふかぎりの注意と熱心とを以て聖言みことばを默考す  
べし而して猶疑ひの存するあれば神のことにつきて  
經驗の深き先覺者の意見をとふべし斯の如くにして  
吾が學び得たる所を讀者に教へんと欲するなり



六此故に予は天に到るの途に關して聖書に示されたる所を此説教に書き止めたりこれ人間の發明したる多くの途よりして神の教へ給ふ途を區別せんが爲めなり予は之を書くに當り只眞理に合ひ聖書に適ひたる實驗的宗教を現はさんことを勉めたりまた特に願ふ所は今將に天に向て進まんとするもの(此の如きものは神の事を多く知らざるが故に迷ひ易きなり)を擁護し儀式的外面的にして心靈を重ぜざる偽の宗教に迷はざらしめんことなりこれ第一の願なりまた次には既に心靈的宗教を知り愛によりて働く信仰を有せる人々を警め彼等が信仰によりて律法を空ふし再び惡

魔の陷阱に陥ることなからしめんと欲するなり

七友の忠告に従ひ此説教集に加ふるにオクスフォールド大學にて爲せる予の三ツの説教と吾弟の説教とを以てせりこれ予を批難して數年前の所説を纏し教理を變更したりと爲す者に對する適切なる答辯なりと信ずるが故なり苟も理解力あるものにして予が前後の説教を比較せば果して前説を變じたりや否を知り得べし

八然れども或はいはん予は他人を教ふるの責任を負へりと雖も己れ自らは其途を誤れるものなりと夫或は然らん然れども予は苟も誤謬あらば之を改むるに吝

なるものよあらず常に喜んで世の高論を聞かんと欲するなり故に神と人とに向ひて曰はんわが知らざる所をわれに教へよと

九爾若しわれよりも一層明かに眞理を見るの明ありと信ずる乎然らば爾自らにせられと欲ふ如くわれにもその如く爲せ即予が知れる所より優れる途をわれに示し聖書の明亮なる證明により其然る所以を教へよ然る時尙予は辿り來りたる途に踟躕して去るを好まざる如きことあらば手を取りて助け導けわが足弱りて歩み遅しとも怒りてわれを倒し遂に行く能はざるに至らしむる勿れ予を正しき道に導かんとして甚だ

しくわれを責むる勿れこれ予を正しき道に歸らしめず却而益爾に遠かり彌道を離るゝに至らしむればなり

一予思ふに爾若し怒らば予もまた怒らん去らば遂に眞理を發明することなくして止まんのみ憤怒の念一たび發し來らば予が靈の眼はくらみ何物をも明かに見るを得ざるなり故に若し避くるを得ば互に謹みて他を怒らすることなげん怒は地獄の火を燃やして之を煽ぎ立つるが如しよし此光により其理を認むることありとも何かせん愛はたとへ眞理を有せずとも愛なき眞理よりは遙かに優れるものなれば多くの眞理を

知ることなくして死するとも若し愛あらば尙アブラハムの懐に入らん之に反し若し愛なくして死せんには智識は何の益する所あらんや神は吾等が此状態にて審判の坐に至るを欲し給はず却而其愛を以て吾等に充たし喜悅と平和の裡にすべての眞理を辨へ知るに至らしめ給ふなり

ジョン・ウエスレー

### 序 文

美以教會の信仰個條、ウエスレーの五十二の説教及新約註疏此三ツの者は美以教會一般の標準教理なり信仰個條は廿五ヶ條にして英國監督教會の信仰個條三十九個條を省畧したるものなるが初めに之を米國に於ける美以教會の標準教理となし後英國美以教會も三十九個條に代ゆるに此二十五個條を以てするに至れりウエスレーが個條を省略したる目的はカルビン主義の教理及羅馬教の傳説を全く排斥せんが爲めなり此信條の中には三位一体神の子復活救拯、聖經、自由意志、義と稱せらるること、善行をおこなふ事等の教理を含有し正統教會の教理

と相一致するが故に美以教會は之を以て他の新教の教會と其信仰を同じふせり然れどもウエスレー及美以教會の特別なる教理は此信條の中に在らずしてウエスレー説教集及聖書註疏の中に存すこれ他の教會の信仰個條若くは教會問答を以て其標準教理と爲すものと大に異なる所なり凡そ教會の標準教理は教會勃興の當時に於ける性質を帶ぶるものなりルーテルの宗教改革は主として教理を論争したるものなるが故新教々會は自ら信仰個條を以て標準教理となすに至れり美以教會の制度同盟會組會愛餐式の如きも教會運動の必要に應じ内より生じたるものにして外より借り來りたるが如きに

あらず而してウエスレーの運動は教理の論にあらずして福音の宣傳なり即ち聖書に基きて道を傳ふることあり故に其説教及新約註疏を以て美以教會の標準教理と爲したるは適當なりといふべしまたこれによりて益する所少なからずたとへば信仰個條の如きは簡短に解説すべきものなるが故往々にして意義の明瞭を缺ぐことありと雖も説教若くは註疏に於ては充分に趣旨を説明し得るが故に誤解を來すことなし  
博士パーウオツシユ氏の説を假りてウエスレーの説教に含める主なる教理を擧ぐれば即左の如し  
一償罪に關し神の人に與ふる恩惠は普くして偏りなき

- 一 意志の自由及神に對する吾人の責任
- 二 三心と行を潔くすることは宗教に於て絶對的に必要なこと
- 三 四 墮落したる人間は己が固有の力と行によりて全く潔くすること能はざること
- 四 五 潔くなるの必要ありて之を爲し能はざる爲め且過去の罪のゆるしの爲めにキリストの救は吾等に備はれること
- 五 六 此救の惟一の條件は只信仰にあること
- 六 七 聖靈の證明により此救に入りたることを意識すること

と

ウエスレーは論理に達したる人なるが故に説教の組織自ら整然たり讀者宜しく熟讀玩味すべしまたウエスレーの運動に抗し其説を駁したる當時の時勢に照らして此書を讀まば感一層深かるべしまた此説教は哲學思慮の結果にあらずして實に默念祈禱感謝讚美若くは傳道事業等活動の間より生じ來りたるものなれば聖書の如く歴史上の事實と離る可らざる關係を有し從而讀者は之に依りて人生の活問題を解釋するの力を與へらるべし

目録

|     |                 |      |
|-----|-----------------|------|
| 説教一 | 信仰に由りて救はるゝこと    | 一頁   |
| 同 二 | 似而非なるクリシチャン     | 二五頁  |
| 三   | 寢たる者よ目を醒まして起さよ  | 四三頁  |
| 四   | 聖書的の基督教         | 六九頁  |
| 五   | 信仰に由りて義と稱せらるゝこと | 一〇三頁 |
| 六   | 信仰の義            | 一三二頁 |
| 七   | 神の國に至る道         | 一五七頁 |
| 八   | 聖靈の初めて結べる實      | 一七九頁 |
| 九   | 奴たる者の靈、子たる者の靈   | 二〇三頁 |
| 一〇  | 聖靈の證 其一         | 二三三頁 |
| 一一  | 聖靈の證 其二         | 二五九頁 |

|    |              |      |
|----|--------------|------|
| 一一 | 我儕の靈の證       | 二八五頁 |
| 一二 | 信徒の罪につきて     | 三〇七頁 |
| 一三 | 信徒の悔改        | 三三五頁 |
| 一四 | 大開延          | 三六九頁 |
| 一五 | 受恩の方法        | 三九七頁 |
| 一六 | 心の割禮         | 四三七頁 |
| 一七 | 新生の特質        | 四六一頁 |
| 一八 | 神に生るゝ者の大なる特權 | 四八五頁 |
| 一九 | 我儕の義なる主      | 五〇七頁 |
| 二〇 | 山上垂訓 其一      | 五三七頁 |
| 二一 | 山上垂訓 其二      | 五七三頁 |
| 二二 | 山上垂訓 其三      | 六一一頁 |

|    |         |      |
|----|---------|------|
| 二四 | 山上垂訓 其四 | 六四九頁 |
| 二五 | 山上垂訓 其五 | 六八五頁 |
| 二六 | 山上垂訓 其六 | 七三三頁 |

爲斯列說教集

英國 ヴォン、ウエス イ著

米 國 エス、エイチ、ウエインライト

日 本 櫻井成明 共譯

第壹編 信仰に由りて救はるゝこと。

七百三十八年六月十八日オクスフォールド大學聖マリヤ會堂にて

爾等恩に由りて救を得てこれ信仰に由りてなり。

以弗所書二〇八

(一) 神の人と與へ給ひし諸の福祉は唯神の恩惠優恤より出でたる者なり。是れ神の功績なくして與へ、人の元當に受く可らざる所の者にして、人は神の數ある矜恤の一だに之を受くべき權利は全く之れ無きものなり。在昔エホバ一土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入れ、其魂に神の像を印し、萬物の長と爲し給ひしは、



是れ全く人の功績なきに授け玉ひし恩恵なり。此の如き恩恵は今日に至るまで猶我  
 儕の生命呼吸其他もろくの事物の上に存せり。何となれば我儕は如何に善くある  
 も、如何に善き徳を有するも、又如何なる善を爲すも、神より何等の恩恵をも受く  
 ること能はざるなり。「げにエホバよ我儕の行ひし所はこれ汝の成したまへるなり」  
 と預言者のいひしが如し。故に功績なくして神の授けたまふ矜恤は枚擧に遑わらず、  
 而して如何なる義にても人の之を有せるは是も亦神の賜なり。

(二) 然らば則ち罪ある人は何を以て己が罪惡の一小部分たりとも贖ふべきか。  
 おのが工を以てすべきか。否らず。たとひ其工は多くとも、或は聖くとも是れ其人  
 の有に非ずして、神の有たるなり。されど其工たるや眞に皆聖からずして罪に満ち、  
 一として新しき贖を要せざるはなし。視よ、よからざる樹木は亦よからざる果實  
 を結ぶ如く、其心靈は既に腐敗し嫌惡すべき者となりて、固より「神の榮を受く  
 るに足らざるなり」、即ち初め造物主の像に従ひて、其たましひに印せられし榮光あ

る義を離れたる者なり。故に彼れ自己にはあびつらふべき正義もなく、工も  
 なく、神の前には其口全く緘せられし者なり。

(三) 若し罪ある人にして一旦神の恩寵を得んか、これ「恩恵に恩恵」を得たるな  
 り。若し神猶我儕に授くるに福祉、否、福祉中の最も大なるもの即ち救拯を以てし  
 たまへば我儕はた何の言葉か之に對ふべき、唯「其言盡くされぬ神の賜物によりて  
 吾神に感謝す」るの外なきなり。是れ當然の事なり。「基督我儕の尙罪人たる時我儕  
 のために死にたまへり神は之に由りて其愛を彰し給」へり。然らば則ち「爾恩恵に  
 よりて救を得是れ信仰に由るなり」。實に恩恵は救拯の根源にして信仰は其要件也。  
 今神の恩恵より離れざらんが爲め我儕の最も注意して研究すべきことは、

- 第一。我儕の由て以て救拯を得べき信仰は如何なるものなりや。
- 第二。信仰に由りて來る救拯は如何なるものなりや。
- 第三。如何にして救拯に關する抗論に應ずべきや。

是れなりとす。

第一。我儕の由て以て救拯を得べき信仰は如何なる者なりや。

(一) 其信仰たるや唯異教人の信仰の如きものに非ざるなり。夫れ神は異教人に要めたまふに彼等が神の存在を信じ、且つ神は必ず己を求むる者に報賞を賜ふ者なることを信じ、また唯一の神として之を尊崇し、諸の事につきて之に感謝を捧げ、同胞人類に對して徳義、公直、矜恤、眞實を實踐躬行するによつて始めて之に事ふるを得べきものたるを信ずることを以てせり。是故に或は希臘人羅馬人のみならず、シ、ニヤ人印度人たりとも神の存在、性質、未來に於ける賞罰及び道德の必ず遵奉すべき者たるを信することなくば、彼等推諉るべきやうなきなり。然れどもこれは異教人としての信仰たるのみ。

(二) 第二、其信仰や悪魔の信仰の如きものに非ず、たとひ此信仰や頗る異邦人の信仰に優る所ありと雖も猶救拯を得べき所のものに非ざるなり。何となれば悪魔

は既に賞するに恩恵あり、罰するに假借なき賢明有力なる神の存在を信するのみならず、猶一步を進んで耶蘇は神の子、基督にして、世の教主たることをも信せり。是故に彼は公言して「われ爾は誰なるかを知る即ち神の聖なるものなり」(路四〇三十四)と曰へり。其他悪魔は謂ゆる聖なる者の口より出でたる言を信するはもとより、往昔聖徒の記述せし者までも信じをすることは我儕の疑を容れざる所にして、たとへば彼のヒリビに於てパウロ、シラスの兩人を見て「此人々は高き神の僕にて救の道をわれらに述ぶる者なり」と叫びて、高尚なる證明を爲さざるを得ざりし如き是れなり。此に由て之を觀れば神と人との大敵たる悪魔はまことに神の肉を假りて顯現し玉ひしこと、「諸の敵を其足の下に踏みつけたまふこと」及び聖書は皆神の默示なることを信じ、且つ戦慄さぬ。蓋し悪魔の信仰はかくの如くに達せる所あり。」

(三) 第三、我儕の由て以て救拯(後文述ぶる所の意義の救拯)を得べき信仰は唯基督在世中に於ける使徒等が信仰に非ざるなり。彼等は一切を捨てて基督に従ふは

必に之を信じたり、彼等は又「奇蹟を行ひすべての病すべての疾を醫す權を有ら  
たるのみならず、凡ての悪鬼を出す能力と權威を有てり」と、尙此等にも優りて「神  
の國を宣傳へんため」其主より遣はされたりしと雖も、而も彼等の信仰は救を得べ  
き者に非ざるなり。

(四) 然らば則ち謂ゆる我儕の由て以て救拯を得べき信仰とは何ぞや。先づ之を  
概言すれば基督に在る信仰是れなり、基督を信じ、基督に由りて神を信するは其目  
的とする所なり。是れ則ち此信仰の古今異教人の信仰とは全く絶對に異なる所以な  
り。而して又悪鬼の信仰よりも全く異れり、即ち唯冥想的唯理的のもの、冷かに活  
力なき承認の及び頭腦に於ける觀念の連續のみに非ずして又心情本然の歸向なり。  
何となれば聖書に「夫れ人は心に信じて義とせられ」、又「若し口にて主耶穌基督を  
認はし又爾心にて神の彼を死より甦らせしを信せば救はるべし」と教めれば  
なり。

(五) 又此信仰の主耶穌在世中の使徒等の信仰と異なる所以は主耶穌の死の緊要に  
して功德あり、而して其甦生の權能あることを承認するに存す。蓋し此信仰や基督  
の死を以て永遠の死より人間を贖ふに足るべき唯一の方法となし、又其甦生を以て  
我儕を生命と不死不朽に復らしむる方法なることを承認するなり。是れ「耶穌は我  
儕が罪の爲めに解され又我儕が義とせられん爲めに甦生らされたり」とあるに據る  
なり。是故に基督信徒の信仰なる者は常に基督の福音全体を承認するに止らずし  
て、又其血に全く信頼することなり、即ち基督の生、死、甦生の諸功德に頼り、基  
督は我儕の爲めに與へられ、又我儕の中に住み、又我儕の賠償、我儕の生命として  
之に頼り、以て我儕の「智慧また義また聖また贖」一言に約すれば我儕の救拯と  
して之に接近し、之と和合するの信仰なり。

第二。此信仰に由りて來る救拯は如何なる者なりや、是れ第二に考究すべき問  
題なり。

(一) 第一、此救拯は如何に多くの意を含有するにせよ、現時の救拯たるや明なり。此の如き信仰を有する者は實際この世にて此救拯を得べきなり。何となれば是れ使徒パウロがエペソの信徒に語りし所、又彼等によりて後世の信徒に語る所なればなり、即ち使徒は爾信仰に由りて救を得べし(或は時に此事あるも)と曰はずして「信仰に由りて救を得」と断言せり。

(二) 約言すれば爾は罪より救はれたりと曰ふなり。是れ信仰に由れる救拯なり。此救拯は神いまだ其獨子を世に降し玉はざりし時彼の天使をして「其名を耶蘇と名くべし蓋其民を罪より救はんとすればなり」と預言せしめたる所の大なる救なり。而して此語及び聖書他の部分によるも救拯に制限拘束あらざるなり。凡て神の民即ち聖書の語に従へば「凡て彼を信するものは神彼等を其諸の罪より救ひ玉ふなり、蓋し肉体及び靈魂にて犯したる原罪實罪及び過去現在の罪より救ひ玉ふなり。神を信する信仰に由りて彼等は有罪及び其權威より救はるるなり。」

(三) まづ凡て既往の有罪より救はるるなり、其理由たるや世の人皆神の前に於ては有罪のものにして、若し神「もろくの不是事に目を止めたまは、誰か能く立つことを得ん」といふ程なり、又「律法により始めて罪は知らるる」とも律法の行を全うせんとすれば神の前に義とせらるるもの一人だにあることなり」の場合に立至りて之を救ふの方法あらざるなり、此時に當り「耶蘇基督を信するに由りて其義を神は凡て信する者に顯はし玉へり」。此故に「彼等は基督耶蘇の贖によりて神の恵を受け功德なくして義とせられたり」。又「神は忍びて既往の罪を寛容に爲したまひしかと其義をあらはさんとて耶蘇を立て其血を信する者の挽回の祭物とせり」。此の如くして基督既に「我儕の爲めに誼はるる者となりて我儕を贖ひ律法の誼より脱れしめたり且つ手にて録しし所の我儕を攻むる規條の書即ち我儕に逆ふものを塗抹し此を中間に取去り釘を以て其十字架に釘けたまへり」。是故に耶蘇基督を信する者は罪せらるることなきなり。

(四) 而して斯く彼等有罪より救はれしかば亦恐懼より救はるゝなり。蓋し父としての神に對する不孝の恐懼より救はるゝに非ずして凡て卑屈なる恐懼、苦痛に満ちたる恐懼、刑罰を蒙るの恐懼、また將に來らんとする神怒の恐懼より救ふ者なれば彼等は今や復た神を嚴主の如く思はずして寛大なる慈父と爲すに至れり。即ち「彼等が受けし靈は奴隸たる者の如く復び懼を懐く靈に非ずアバ父と呼ぶ子たる者の靈なり聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す」るなり。而して彼等は又たどひ神の恩恵より墜ち、その大にして貴き約束を離るゝ可能性よりは救はれずとも、其墮落せんとする恐懼より救はるゝなり。此の如くして彼等は「我儕の主耶穌基督により神と和平く」ことを得たり。彼等は「神の榮光を望みて悦」べり。而して「彼等に賜ふ所の聖靈に由りて神の愛彼等の心に灌漑げ」り。此によりて彼等は「或は死或は生或は今ある者或は後ある者或は高き或は深き又他の受造物は我儕をわれらの主耶穌基督に頼れる神の愛より絶らすること能はず」と信するに至りたり。(た

どひ各人常にかくあるに非ず、或は之に等しき確信あらざるも。)

(五) 次に此信仰に由りて彼等は有罪より救はれし如く又其權威より救はるゝなり。故に使徒曰ひけるは「我儕が罪を除かんために主の顯はれ玉ひしことは爾曹の知る所なり彼また自ら罪なし凡そ彼にをる者は罪を犯さず」。約一書三〇五、六と。又曰ひけるは小子よ人に惑はさるゝこと勿れ罪を犯す者は惡魔より出づ凡て信する者は神に由りて生れたるなり凡そ神に由りて生るゝ者は罪を犯さず蓋は神の種其衷に存するに因る彼又罪を犯すこと能はず蓋神に由りて生るればなり」と。又曰く「凡て神に由りて生れたる者の罪を犯さゝることを我儕は知る神に由りて生れたる者は自ら守る彼惡者之に觸るゝことを爲さゝるなり」(同五〇十八)と。

(六) 凡そ信仰に由りて生れたる者は、(一) 習慣の罪を犯さざるなり、何となれば凡て習慣となりたる罪は我儕を左右する者なれども、凡て神を信する者をば左右すること能はざるなり。(二) 故意の罪を犯さゝるなり、何となれば彼れ信仰に在る

問は其意志すべての罪に全く逆ひ、之を惡むこと死毒の如くなればなり。(三)惡念のために罪を犯すことなし、何となれば彼は常に神の聖くして完全き意志を庶幾しをるが故に聖からぬ念願に陥らんとする傾向ある時は直ちに神の恩恵により其當初に於て之を壓し止むればなり。(四)又彼は思想言行に於て其薄弱のために罪を犯すことなしとす、何となれば薄弱は彼の意志と相關せざるが故に正に之を罪とはいふ可らざればなり。此故に「凡て神に由りて生るる者は罪を犯さず」といふ、たとひ既往に於て罪を犯さざりしといふ能はざるも、今や罪を犯さずと言ひ得るなり。

(七) 以上陳述せる所は現世に於て信仰に由りて來る救拯なり、即ち罪及び其結果を免るる救拯なり。而して此二のものゝ救拯を言つて義と稱せらるると曰ふこと屢ば之れあり。義と稱せらるるとは其意を大にすれば今基督を信する罪人の靈魂のために備へられたる贖罪によりて、有罪の宣告と刑罰の執行とより免れ、又其心に基督の狀成るによりて、罪の機能より救はるるの意なり。故に神の前に義と稱せ

られたる者或は信仰に由りて救はれたる者は實に新に生れたる者なり。其人は聖靈によりて「基督と偕に神のうちに藏れたる」新き生命に再生したるなり。而して新に生れたる嬰兒の如く彼は喜んで心を養ふ眞の乳を受け、此に由りて生長し、主なる神の大能の中に在りて信仰より信仰に移り、恩恵より恩恵に進み、遂に「全人即ち基督の満足るはと成るまでに至る」なり。

第三、此救拯に關して第一に來る普通の抗論は、

(一) 抑も救を得、若くは義と稱せらるるは唯信仰に由るとするは是淨聖及び善行に反抗する説なりと。之に簡短なる答辯を爲さん、曰く若し「我儕にして或人の如く淨聖と善行とより全く離れたる信仰を宣るなれば或は然らん、されど我儕の宣ふる信仰は此の如き者に非ずして、諸の善行と淨聖とを生ずる所の者なり」と。

(二) 然り而して我儕審に此抗論を考ふれば亦補益する所なしとせず、蓋し是れ近世に起りたる者に非ずして、使徒パウロの時に於ても行はれ、「我儕は信仰を以

て律法を廢るや」の抗論出でたることあり。我儕之に答へん、第一すべて信仰を宣傳へざる者は明に律法を廢る者なり、即ち題句の眞意を消滅せんとする制限及び解釋のために或は直接明白に律法を廢て、或は律法を實行し得べき方法を示めざるに於て間接に律法を廢るなり。然れども我儕は第二に律法の全き範圍及び其精神の意を顯はすことと、「律法の義は彼等に成就せんが爲め」、彼等を生ける道に招くこととの二によりて始めて「律法を堅固す」るなり。彼等基督の血に頼る以上は基督の定めたまひし諸の式典を守り、基督の預め備へて彼等をして遵はしめんとしたまふ善行」を爲し、又すべて聖くして天につける性情のみならず、耶穌基督に在りて心を同らせんことを悦び顯はすなり。

(三) 難者曰く此の如き信仰を宣傳ふれば人をして驕傲ならしむるとなきか。然り、或は偶然に之れ有らん、故に信徒たる者は常に大使徒の言に従ひ、大に警愼を加へざる可らず、使徒われらに告げて曰く「不信仰に由り原枝は折られたり爾が

立てるは信仰に由るなれば誇る勿れたり戒懼上蓋神もし原樹の枝をさへ惜まざるは恐くは爾曹をも惜むまじされば神の慈と嚴なるを觀上其嚴なることは蹟れし者に顯はれぬなんち慈にをらば其慈は爾に在らん然らざれば亦爾も破離さるべし」と。而して使徒はあらかじめ此抗論を先見して之が答辯を爲し置きぬ、いはく「誇るところ何處に在るやあることなし何の法を以て無しとするか、行の法か非らず信仰の法なり」と。若し人其行に由りて義と稱せられしならば之に由りて榮譽を得べし。されば「工なき者」は榮譽なけれども「不義なる者を義とする神を信じて」、始めて榮譽を得るなり。之と同じく使徒は題句の前後に於て「矜恤に富める神われら罪に死にし時にすら我儕を基督と偕に生かしたり（爾曹恩恵によりて救はれしなり）是れ基督耶穌の中に我儕に施す所の仁慈を以て其恩の勝れて豊なることを顯はさんためなり爾曹恩恵に由りて救を得これ信仰に由りてなり己に由るに非ず神の賜なり」といへり。即ち卿等かのれに由りては信仰も出でず救も來らず、唯功績

なくして與へ、人のもと當に受く可らざる所の「神の賜」によりて己も救はるる信仰も、神みづからの歡樂にして又其恩恵より出づる救拯も兩つながら卿等に來るなり。卿等の神を信するは是れ則ち其恩恵の一、而して信するに由りて救はるるも亦其恩恵の一なり。又曰く「行に由るに非ず此の如くなるは誇る者なからんためなり」と。夫れ我儕の神を信する前になしたる諸の工も諸の義も神の前には實に價値なき者にして、唯罰に當らざる者なるのみ、かく當然の信仰より遠かりをればたとひ信仰を與へらるるも是れ實におのれの工に由るに非るなり。且つ我儕神を信する時と雖も我らの救拯は我儕の爲したる工に由らざるなり、何となれば神既にわれらの中に働きたまへばなり、故に神みづから働きたまひたるに由りて、われらに榮譽を與へ玉ふは是れ唯神の恩恵の豊なるを顯はすものにして、誇るべき所は一もわれらに存せざるなり。

(四) 然りと雖も若し神の矜恤は人をして功績なきも唯信仰に由りて救はれ、又

義と稱せしむとする時は、人をして益すく罪の業に安んせしめざるや。曰く、實に或は然らん、即ち「恩恵の増さんために罪に居る者」は多からん、然れども彼等の血は彼等の首に歸する者なり。夫れ神の慈仁は彼等を悔改に導くものなればすべて心の信實なる者は悔改するに至らん。彼等若し神尙おのれの罪を救ひ玉ふことを知るや直に絶叫して耶蘇に居る信仰に由り其罪を拭ひ去られんことを求むるなるべし。而して彼等叫んで倦むことなく、神の教示し給ひし諸の方法に由りて求め、又神かれらの心に來りたまふまで他の慰藉を拒みをれば「神は來らん必ず遅からじ」。而して神は能く少時にして許多の働きを爲し玉ふべし。我儕は使徒行傳に於て神の人心に働き給ふ信仰は天より落ち來たる雷電の如く迅速なりしことの例數あるを見る。即ちパウロ、シラスの二人福音を傳へたる時直に獄吏は悔改め信じてバプテスマを受け、又ペンテコストの日に於てペテロ始めて説教を爲ししが三千人一時に悔改め、耶蘇の名を信じたり。今日と雖も神は救拯の大能を有し玉ふことの生ける證



據實に抄しとせず、嗚呼神は讃むべきかな。

(五) 猶同じ真理にして其着眼を變ゆれば又一の全く反對せる抗論を見るなり、曰く若し「人力を盡して働くとも其工に由りて救はれずとせば遂に絶望するに至らん」と、然り、かのれの工、かのれの功績、及び己の義に由りて救はれざる者の絶望するは理の當然なり。何となれば若し人全く自己を棄てざれば基督の功德に依頼すること能はざればなり。故に己の義を立てんことを求むる者は神の義を受くること能はず。信仰に由れる義は律法に由れる義より離れざれば神より與へられざるなり。

(六) 論者又曰く然れども是れ不快の教義なりと。夫れ惡魔の此の如き教義を人に告ぐるや其言語恰も自己を顯はせる者にして、真理もなく及羞耻も感ぜざるなり。然れども我儕の論する所は惡魔の言に非ずして神の言なれば、自暴自棄せる罪人には實に安慰に満ちたる唯一の教義なり。故に曰く「凡て彼を信する者は辱められ

と蓋すすべての者の主は唯一なればなり凡そ之を願ひ求むる者には恩を豐盛にす」と。是れ天よりも高く死よりも強き安んずる者なり。難者又曰く、何ぞや。矜恤は衆人の爲めなりや。ザアカイの如き公然の盜賊の爲めなりや。マグダラのマリヤの如き普通の娼妓の爲めなりやと。而して更に「さらばわれ如き者も亦其矜恤に與るの望みあり」といふ者あらん。吁、誰も慰むる者なくして苦心せる者よ、卿の言ふ如く卿は矜恤を得ん。神は卿の祈禱を放棄し給はざるべし。否、神は直に「心安かれ爾の罪赦されたり」といひ給はん、即ち卿は赦されて、罪ふたゝび卿を左右せざるに至らん、然り、「聖靈自ら卿の靈と偕に卿が神の子たるを證す」べし。嗚呼まことに喜ばしき音なるかな、萬民のために傳へられたる大なる喜の音なるかな。「臆怖曹渴ける者悉く水に來れ金なき者も來るべし爾曹來りて金なく價なくして買へ」。卿の罪は、たとひ「紅の如く赤くなりたる」も、頭髮より數多きも「エホバに歸れ然らば憐憫を施し玉はん我儕の神に歸れ豊に赦罪を與へ玉はん」。

(七) 難者の抗論は既に盡きぬ、茲に唯我儕に告げて「獨り信仰に由りてのみ救はるゝの事は第一の教義として之を宣傳すべき者に非ず、又少くとも萬民に宣傳すべき者に非ずといふ者あり。然れども聖靈は如何にいひしや、「置たまひし基礎の外に誰も基礎を置くこと能はざるなり此基礎は即ち耶穌基督なり」と曰ふに非ずや。然らば「凡て彼を信する者は救はるべし」とは是則ち我儕宣傳の基礎たり、又基礎たるざる可らざる者なれば、第一に宣傳ふべき者なり。又曰く「されども萬民に宣傳すべき者に非ず」と。然らば我儕は之を何人に宣傳へざる可きか。何人を除く可きか。貧人なるか。然らず、彼等は福音を宣へ傳へらるべき特別なる權利を有せり。無學の者か。否。神はすべての事を初めより無學昧の徒にあらはし玉へり。さらば年少者なるか。大に然らず。如何にもして「彼等を釋して禁することなく」、基督に來らしむべきなり。罪人なりや。決して然らず。「我が來るは義人を招く爲めに非ず罪ある人を招きて悔改めさせんが爲めなり」と基督は宣ひぬ。然らば則ち獨除く可

き者ありとせば是れ富者、學者、名望家、道徳家ならん。彼等は常に我に聽かずして、自ら己を神より除く者なり。然れども我儕は進んで彼等に主基督の言を傳へざる可らず。何となれば我儕の使命は「往きて凡ての人に福音を宣傳へよ」との一點に在ればなり。何人たりとも之を變じ、或は其一部を壞れば是れ己を害し己を毀つ者にして、其罪己に歸せざるを得ず。嗚呼「エホバは生くエホバの言ひたまふ事はわれ之を言はん」。

(八) 此時に當て我儕は特に「爾恩恵に由て救を得是れ信仰に由れる」とを語る、蓋し此教義を主張する所以の者は今日は最も適切なる時機なればなり。此教義を除きては他に羅馬教會の妄念を全く防止する者なきなり。實に彼の教會の誤謬を一々指摘して排撃するに暇なしと雖も、此信仰に由る救拯は衆謬の根本を打破する者なれば、一たび此教義にして立たば衆謬立ちどころに倒るゝなり。蓋し此教義や我教會の正に基督教の堅石にして基礎と稱し、此大英國より羅馬の教義を追放し、復た

入ること能はざらしむる者にして、蕩々たる不徳を妨遏するも亦此教義の力に由らすんばあらざるなり。見よ、誰か此深き不徳の大海を一滴汲み盡し得べきか。或はさまざまの規諫を以て特種の悪業を改めしむることもあらん。されど「信仰に由りて神の與へたまふ義」をして顯はれしめ、以て彼の不徳の怒濤強波を禁めしめよ。「おのが羞辱を其榮とし、己を贖ふ主を主とせざる者」の口を鍼せしむる者は此を措きて何かある。彼等は律法につきて語ることも憎も神其心に記したまひじ如く、いと嚴かに語るを得べし。又彼等此事を論するや人をして彼等は神の國より遠からざる者たるを思はしむ。されど彼等をして律法を離れ、福音に來らしめ、而して信仰に由れる義を學ばしめ、「すべて信する者の義とせられんために律法の終り」となれる基督を知らしめば殆んど(若し全くならざれば)基督信徒の如く見ゆる彼等も今は滅亡の子なること顯はれ、恰も蒼穹の高きと地獄の低き大に隔離せるが如く、生命と救拯とより實に離れをることを感ずるに至らん。(神よ彼等を恵みたまへ)。

(九) 以上の理由に由りて「信仰に由れる救拯」の世界に廣宣流布せらるる時は我儕の惡魔は常に忿怒を發し、又之を初に宣傳する者を亡さんため地と地獄とを宣動す。又此理由によりて彼は唯此信仰の能く自國の基礎を顛覆することを知りたれば嘗て此教義を復興せんとしたるマルチン、ルウテルを恐怖せしめんとて、あらゆる虚偽謬謗の詭術を用ゐたりき。然れども是れ固より驚くに足らず。蓋し神の人ルウテルのいひし如く「堅き武具を備へ、誇り傲ぶれる驕者が蘆の杖を携へておのれに向ふ一小兒の爲めに防ぎ挫かるるに至れば怒らざらんと欲するも得べけんや。殊に其小兒は必ず己を覆し以て其足下に蹂躪せずんばやまざるを知るに至りては益す憤激して怒を發せん。而して主耶穌よ此の如くして爾の力は常に「弱きに於て完全くなり」しなり。然らば則ち卿、主耶穌を信する小子よ、往け、基督の「右の手卿に畏るべきことを教へん」といひ卿嬰兒の如く力なく弱しと雖も彼の驕者豈に能く卿の前に立たんや。卿は進んで彼に勝ち、彼を従へ、彼を倒し、又彼を足下に蹂躪す

べし。卿は卿を救へる元帥の命に従ひ、其惡魔の遂に全く滅び、「死は勝にのまる」まで「常に勝ち又勝を得んとて進み行くべし。」  
 されば「我儕をして主耶穌基督に由り勝利を得せしむる神に謝すべし」、願くは父と聖靈と我主とに福祉、榮光、智慧、感謝、榮譽、權威、大能世々かぎりなくあらんことを。  
 アーメン

似而非キリスチヤン

(譯者曰く是れ英語の「オールモスト、クリスチヤン」を譯せるものにして全然に非ざる半熟のクリスチヤンを指せるなり、適當の譯語を思出さざる儘斯くは言へり讀者請ふ諒焉。)  
 千七百四十一年七月廿五日オックスフォールド市セイントメリー會堂に於てオックスフォールド大學に對して

爾我を勸めて殆んどキリスチヤンと爲さんとす「キング、ゼームス」譯に基く  
 使徒行傳廿六章廿八節

這般の人々世には寡からず、基督教の起りし以來、何れの時代、何れの國民を問はず、所謂殆んどキリスチヤン爲らんとする者は随分多かりき、然れども唯だ此邊に停滯して敢て數歩を出づることなくんば、神の前には無用の者に過ぎざるが故に、其意義を明かにするは極めて肝要の事たらずんばあらず。  
 第一、殆んどキリスチヤンと云ふ辭は如何なる意義を含有するや。  
 第二、全くキリスチヤンたりとは如何。

第一

一 殆んどキリスチャンたる者、即ち似而非キリスチャンとは、異教的正直を含むなり。余は何人も此點に就ては疑を挟む者無かるべしと思ふ。殊に吾人の所謂異教的正直とは、唯だ異教國に於ける賢哲の書に載せたる如きもののみを言ふに非ずして、普通の異教人民が互に理解して、其多數者が平生實行するが如き正直を指せばなり。此異教的正直の規矩に準りて、彼等は自ら正ふべきこと、竊盜或は強奪によりて、隣人の物品を掠むべからざること、如何なる交渉に於ても、貧者又は富者を欺かざるべきこと、人の權利を侵さざるべきこと、可成的何物をも他人に負はしめざるべきこと等を教へられしなり。

又異教徒は眞理並びに正義に對しては、稍や崇敬の念無かるべからざること、認むるが故に、彼等は實に誓を破り、又は神を指して虚偽の證を立つるが如き輩のみならず、隣人を誹謗し、又は誣告するが如き者を惡むなり。

更に又彼等の中には一種の相互の愛と援助と行はるべし。偏見を挟まずして他より與ふる援助を承くべし。而して此の如く費用或は勞力を要せずして行はるべき些少の義務に止まらずして、餘裕あれば飢餓に苦む者に食はせ、裸かなる者に衣せ、自ら餘ある物を乏しき者に與ふることを爲すべし。似而非キリスチャンの資格に含む第一の要素たる異教的正直とは此の如きものを云ふ也。

(二) 似而非キリスチャンに含蓄する第二は、一種の敬虔、キリストの福音に示さるる彼の敬虔の一種、即ち眞成キリスチャンの形貌を有すること是なり。此故に似而非キリスチャンは福音書が禁するが如き事を爲さざるべし。彼は妄りに神の名を呼ばず。祝すれども誼はず。また猥りに誓ふことなくして唯だ然り、然り、否な、否なと答ふるに止まるべし。彼は自ら安息日を潰さず。又我が門内に在る旅人の之を犯すことをも許さざるべし。「彼はたゞ姦淫及び凡ての汚行を避くるのみならず、直接間接に之に傾くが如き言葉或は視色を慎むべし。否な誹謗、譏謗、虚言、惡言并び

に凡て愚かなる談話、戯論を避くべし。即ち要するに「人の徳を建つるに用無く之に依りて」救を得る日の爲めに我等が其印を受けたる聖靈をして憂へしむる如き事を爲さざるべし。

渠は沈湎、酔興を自ら禁すべし。可成的争闘、不和を避けて恒に凡の人と睦み親むことを務むべし。而して萬一人より禍害を加へらるることあるも、讐をかへすことなく悪を以て悪に報ゆることなし。渠は隣人の罪過、又は弱點を見ても之を誹議嘲罵ることなし。好んで人を害し、人を傷ましむることを爲さず。何事に於ても「爾人にせられんと思ふことは人にも其如くせよ」といふ明白なる金誠を守りて其言行を苟もせざるべし。

渠は善を行ふに於ても、世の常の親切と云ふ範圍に止まらずして、衆人の利を計りて如何にかして或る人を助くることを得んが爲めに勉勵盡瘁すべし。勞苦を厭はず己の手の爲し得る業ならんには、全力を凝めて之を爲し、其朋友の爲めたり、又は

敵の爲めたり、其善人の爲めたり、又は悪人の爲めたることは敢て問はざるなり。蓋し凡の業に忠實にして怠ること無きが故に、機會に従ひ凡の人の肉体及精神に係はる凡の善事を行ふなり。渠は悪人を戒め、不文を教へ、弱信なる者を強め、善人を勵まし、苦しめる者を慰むるなり。渠は眠れる者を覺まし、神が既に醒まし賜へる者を其罪と汚とを洗ひて潔くせんが爲めに備へられたるかの泉に導き、信仰に由て救はれたる者を勵まし、萬事に於てキリストの福音の光を發揚せしめんと勉むべし。

敬虔の貌を有する渠は、亦凡の機會に従て渾の受恩の方法を用ふべし。渠は間斷なく神の家に詣ると雖も、而かも金銀綺羅を飾りて至高き神前に出で、而して蕪雜なる禮儀、又は輕佻なる舉動に由りて、敬虔の徳は勿論の事其貌すらも没する者の如くにあらざるべし。余は我儕の中に此の如き罪に陥る者莫からんことを祈る。此堂に集まる人々の中に、極めて輕々たる無頓着の有様を以て周囲を顧み、其祈禱に

是一片の誠なく、嚴肅なる禮拜の式中或は眠り、或は催眠に適當なる態度に身を傾  
 け、或は神を以て眠れる者と想像するが如く互に囁き、或は左顧右眄て全く禮拜  
 の式中に在らぬが如き舉動を爲すは彼の敬虔の貌のみを有する者にも及ばず是等の  
 人とても、禮拜の式中常に謹恭と、注意の動作を爲す者なり、晩餐の禮典に與つか  
 る時の如きは殊に然り、渠は決して一點輕々たる舉動無く其姿は實に「神よ罪人た  
 る吾を憫み賜へ」と云ふ悔悟の心底を示す者の如き外に見へざるなり。  
 之に加ふるに、家長たる人々が絶へず家族の祈禱を行ひ、又は特に日々時を設けて、  
 恭しく私かに神と交ることを以てせば、渾て此の如き形式上の宗教を實行する者  
 は、敬虔の貌を有する者と稱するを得べし。去れど似而非キリスチャンたる資格に  
 含蓄するものゝ中尙は唯だ一つを餘せり即ち誠實是なり。  
 (三余の所謂誠實とは是等の外形的動作の流れ来る源泉、宗教の心髓たるものを云ふ  
 なり。而して若し吾人にして之を有することなくんば吾人は異教徒の正直すら有せ

ざるなり、否なかの異教徒エヒキユリアン派一詩人の唱ふる程の正直をも有せざる  
 なり。彼の憐むべき小人輩さへも其眞面目なる時は左の如く歌へり。  
 「善き人は徳を愛するが故に罪を避け、  
 悪き人は刑罰を懼るゝが故に罪を避く。」  
 此故に人若し唯だ刑罰を避けんが爲めに罪を犯すことを避くるならば「爾は既に其  
 報を得たるなり」異教徒すら此の如き無爲無害の人を以て、善良なる教徒と稱ふる  
 ことを許さざるなり。果して然りとせば刑罰を避け朋友、功名、富貴を失ふことを  
 恐れて、唯だ罪惡を犯さざるのみならず、相應の善事を行ひ、宗教上の儀式を悉  
 く守るとも、吾人は此の如き者を似而非キリスチャンと稱ふることすら失當の言と  
 せざるを得ざるなり。若し渠の心中之より勝るものなくんば渠は只だ全然たる偽善  
 者のみ。  
 故に誠實とは似而非キリスチャンの資格には必ず含有せる要素にして、眞に神に仕

へんとする意思、其聖旨を行はんとする欲望を云ふなり。凡の事に於て、凡の行に於て、又現在或は未成の業に於て神を喜ばせんとの至誠なる意思は必ず其中に含蓄するなり。若し人似而非キリスチャンたらんには此の思想は必ず其人の生涯を一貫するものにして、是れ實に渠をして善を行ひ、惡を避け、神の法に遵はしむる動機たらしむるものなり。

然れども、此の如く進歩せる人を以て猶ほ未だ似而非キリスチャンの範圍を脱せざる者とせば全然たるキリスチャンの資格を具ふる人には更に如何なる要素を含むべきやとの疑問起らん。余は先づ答へて云はん。此の如く進歩するも尙ほ未だ似而非キリスチャンたるを得べしと。余は唯だ神の教に由て學べるのみならず、確實なる經驗に依て之を悟れるなり。

兄弟よ此事に關しては、余は卿等に對して甚だ大膽なり。若しこれ卿等と福音との爲めに余の愚を屋上に宣言するものとならば幸に余の過を赦せ。されば余が他にせらるゝことを厭はざる者なり。

人に關はるが如く己に就きて自由に語るを恕せよ。余は卿等の高くせられん爲めには卑くせらるゝことを満足する者なり。我主の光榮の爲めならんには、更に陋しくせらるゝことを厭はざる者なり。

余は此所の多の人々の證し得る如く、多年の間前述の如き地位までは進めり。勉めて渾ての惡事を避け、良心に咎なからしめ、時間を利用し、機を失はずして凡人に善事を行ひ、絶へず注意して宗教上の公私の儀式を守り、凡の時、凡の場所に於て嚴格なる品行を保たんことを勵みたりき。而して余は誠を以て渾て此等の事を行ひ、眞實を以て神に仕ふるの意思を保ち、凡の事に於て其聖旨を行ひ、善戰をたしかはん爲めに吾を召し賜へる神を喜ばしめ、且つ永遠の生命を握らんとするの希望を心より有せることは神之を記憶し玉ふ。而して余は今其聖前に立つ者なり。余は此の如く勉めたりき。然れども吾良心は聖靈に在て此間余は唯だ似而非キリスチャンたりしことを證するものなり。



眞成なるキリストチャンとは此外更に如何なる資格を具ふるものなるやと問ふ者あらば余は左の如く答へん。

(一) 一神に對する愛なり。主宣はく「汝心を盡くし精神を盡し意をつくし力をつくし主なる爾の神を愛すべし」と。此の如き愛は心の全部を包容し、凡の愛情を收め、靈魂の全き容積を滿たし、其能力を十分に働かしむる愛なり。此の如くエホバなる神を愛する者は其心中常に救主なる神に在て歡ぶべし。其歡樂は「萬事に於て感謝を歸する己の主なる神に在り、彼の渾ての願は神と其御名を人々に現はすに在り。」渠の心は常に呼んで曰はく「吾は天に於て爾の外に誰を有するや、地に於て爾の外にわが望むところの者何處に在りや」と。げに渠は神の外に何者をか望まん。渠は此世も此世の物も欲せざるなり。何んとなれば渠は「世に就ては十字架に釘られ、而して世は渠に就ては亦十字架に釘られ」たればなり。渠は「肉體の慾、眼目の慾、ま

た勢より起る驕傲」等に就ては十字架に釘られたり。然り渠は各種の驕傲に就ては死せる者なり。蓋し愛は傲ぶらざればなり。之に反して「愛に居る者は神に居り、神また彼にをる」といふことは渠の眼中何物よりも貴く見ゆるなり。

(二) 眞成なるキリストチャンたる資格に含有する第二の要素は隣人に對する愛是なり。何となれば主曾て「己の如く爾の隣人を愛せよ」と云ひ賜ひたればなり。人若し其隣人とは誰なりや」と問はり、余は世界に存在する各人、萬民の靈魂の父たる神の子各箇なりと答へん。吾人は決して吾人の敵人をも、又は神及我等の靈魂の敵人をも除くことを得ざるべし。キリストの信徒は此等の人をも己の如く、然り「キリストが我等を愛し賜へる如く」に愛すべきなり。其愛の眞意を一層深く味はんと欲する者は、使徒保羅の説明を聞け、曰く「愛は寛忍をなし、又人の益を圖るなり。」愛は妒まず、輕躁の判断をせず、「愛は傲らさず」、却て人をして凡の人の中最微小なる者となし、僕とならしむ。愛は「非禮を行はず」、却て凡の物をして凡の人に相應はし

さるものと爲さしむ。己の利を求めず。却て他人の救を得んことを欲して其益を計る。輕々しく怒らず。愛は憤を捨つ、怒る者は未だ愛に飲ける者なり。一人の惡を念はず、不義を喜ばず、眞理を喜び、凡そ事包容み、おほよそ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍ぶなり。

三) 眞成なるキリストヤンの資格には必ず含有するが故に實際は離す可らずと雖も、尙ほ超然區別して考へ得べきもの更に一つあり。實に全体の根本たるものにして信仰即ち是なり。聖書中之に關する秀妙の言少しとせず。愛の使徒ヨハネ曰く「凡そイエスをキリストと信する者は神に由て生れたるなり」。彼を接けその名を信せし者には權を賜ひて此を神の子と爲せり。又曰く「我儕をして世に勝たしむる者は我儕の信なり」。然り主自ら宣はく「子を信する者は窮なき生命を有ち、かつ審判に至らず、死より生に遷れり」と。

然れども此點に就きて誰も己を欺くこと勿れ。是れ最も注意すべき所なり。悔改

と愛と善行とを産み出さるる信仰は正しき活ける信仰に非ずして、死せる惡魔の信仰なり。何となれば惡魔はキリストは處女より生れしこと、自ら神と稱へて多の奇蹟を行ひしと、我儕を窮なき死より贖はんが爲めに最も苦痛なる死を遂げしこと、三日目に死人の中より甦りしこと、天に昇りて父の右に坐し、世の末日には生ける者と死ねる者とを審判せんが爲め再臨し賜ふこと等を信すればなり。惡魔は此等の信仰箇條を信じ、又舊新約聖書中に書かれたる事柄を悉く信するなり然れども凡て此等の信仰を有せるに係はらず、なほ彼等は惡魔たり、眞成なるキリストヤンの信仰無くして亡ぼさるべき運命の下に立つ者なればなり。「理想的完全のキリストヤンの信仰とは聖書及び信仰箇條を眞實として信するに止まらず、キリストに由て窮なき滅亡より救はるべきことを確信する是なり、キリストの功徳に由て罪は赦され、神の恩恵に和げることを確認し愛の心を以て其誠に遵ふこと是なり」。誰にても己の衷にやどるところの神の力に由て驕傲、憤怒、慾望、「凡の不義」と、

肉と靈の凡の汚穢より心を潔くする所の此信仰を有する者、己れの心に神と人類とに對して死よりも尙ほ強き愛を充たしめ、凡の人の爲めに勞することを榮と爲して神の業を務め、喜んで凡の人より嘲けられ、卑しめられ、惡まれたるキリストの爲めに耻辱を忍ぶのみならず、神の智慧が暫く吾等の爲めに許す所の人、或は惡魔の吾儕に加ふる禍害に耐ふる如き愛を以て其心に充たしむる此信仰を有する者は、似而非に非ずして眞成なるキリストヤンと稱すべき者なり。

然れども誰か是等の事の活ける証人たる者ぞ。兄弟等よ余は地獄と滅亡も其秘密を蔽ふ能はず。况んや人の子等は到底其心の秘密を隠し能はざる神の前に於て卿等が己の心に對して「我は其中の一人なりや、余は異教徒の唱ふるほどの正義、慈悲、眞實等を行ふや、次に然らば余はキリストヤンの外形、敬虔の貌を有するや、余は惡即ち神の言葉の中に禁せられたるものを悉く避くるや、余は己の手の爲し得べき善事を見出したる時全力を以て之を行ふや、凡の機會に従て神の禮式を守るや、

而して凡の事に於て神を喜ばせんとする至誠の意思と希望とを以て此等を行ふや否や」と、自問自答せられんことを切望に堪へず。

卿等は多くは此の如き地位までも進まざりしことを自覺せざるか。似而非キリストヤンたることすら能はざりしこと、異教徒的正直の標準までも及ばざりしこと、少くもキリストヤンの敬虔の貌にも達せざりしことを意識せざるか。况んや神が萬事に於て己を喜ばせんとする衷情を爾曹の中に見ることの稀なりしを疑はんや。爾曹は未だ曾て其言行、業務、學問等を悉く神の榮の爲めに專にすることを思はざりしなり。未だ爾曹は其行ふところ悉く主イエスの御名に由りて行ひ、キリストに依りて神の享け給ふところの靈の祭物」と成らんことを欲せざりしなり。然りと雖も、假りに爾曹を以て此の如き意思を有せる者と想像するも、善良なる意思、善良なる願望のみは、以て人をして眞成のキリストヤンたらしむるか。若し之に伴ふ善良なる効果無くんば、これ徒事のみ。或人「地獄の庭は多の善き意思を以

て鋪かる」と云へるごとあり。去れば之のみにては大問題は未だ解釋せられずして存するなり。神の愛は爾の心中に充溢するまでに灌がれしや。爾は「我神よわが總てなる神よ」と呼び得るや。神の外何物をも望まざるや。神に在りて福なりや。神は爾の榮、爾の樂、爾の喜悅の冠冕たるか。「神を愛する者は亦其兄弟を愛す」といふ。誠は爾の心に銘せらるるや。然らば己の如く隣人を愛するか。爾の靈魂を愛する如く、キリスト爾を愛する如く、凡の人、爾の敵、又神の敵をも愛するか。キリスト爾を愛して爾の爲めに己を捨て給ひしことを信するか。彼の血を信するか。神の羔は爾の罪を負ふて海の深きに石を投ずる如く之を捨て給ふことと、彼は爾に對する罪の證印を奪ひ去り、之を其十字架に釘して其文字を塗抹し給ひしことを信するか。其血に由て贖はれ爾の罪を赦されしや。其靈は爾の靈と偕に爾の神の子たることを證する乎。

我儕の中に今立ち給ふ主イエス、キリストの神即ち父は此信仰と愛とを抱くことな

くして死する者有らば、其人の爲めには却て生れざりし方幸なるを知ろし召し給ふ。去れば眠れる者よ、目を覺まして爾の神を呼べ。その未だ爾を待ち給ふ日の中に呼べ。神其慈恵を爾に及ぼして自ら「憐憫あり、恩恵あり怒ることの遅くして恩と誠の大なる神、恵を千代までも施し惡と過と罪とを赦すエホバなる神」と其御名を爾に宣べ給ふまで、祈りて止むことなかれ。何人が令言虚詞を以て爾をして此高尚なる獲物を失はしめんとするも、之に聽くこと勿れ。却て篤く信じて「我神よ我神よ」と言ひ得るに至るまで日々夜々に「我儕のなほ弱かりし時に罪人のために死に給へる」主を呼べ。爾も亦天に其手を揚げて永遠に活き給ふ神に向て「主上爾は凡の事を知り給ふ、爾はわが爾を愛することを知る」と宣言し得るに至るまで「恒に祈禱して沮喪すること勿れ」。

我儕は皆な似而非の範圍に止まらずして、眞成のキリスチャンとは果して如何なるものたるやを以上の如く經驗し得べし。即ちイエスの贖を経て其恩恵に依り、價

無くして義とせられイエス、キリストに由りて神と和ぐことを知り、神の榮を望んで喜び我儕に賜ふ聖靈に由りて我儕の衷に灌がれたる神の愛を有するに至ることを得べし。

寝たる者よ目を醒まして起よ。

(二千七百四十二年四月四日安息日オックスフォールド大學にて)

「寝たる者よ目を醒まし死より起よ、キリスト爾を照さん」。

以弗所書第五章十四節

是等の言葉の意義を論せんとするに當りて余は神の祐助に依りて、

第一、其所謂寝たる者とは如何なる人物なるかを描き、

第二、「寝たる者よ目を醒まし死より起よ」といふ勸告を主張し、而して

第三、目を醒まして起きたる者に與へらるゝ約束、即ち「キリスト爾を照さん」とい

ふ語の意義を説明せん。

第一、

先づ茲に謂ふところの寝たる者に就きて云はん。寝るとは人間生來の状態にしてアダムの罪に由りて其子孫たる全人類が遂に陥るに至りたる精神上の昏睡、各人が此

世に生れ出づるより神の聲之を醒ますに至るまで繼續する所の怠慢、魯鈍、己の眞  
 狀を悟らざる無神經の有様を云ふなり。「寢る者は夜寢るなり」、人間生來の狀態は  
 黑暗の狀態なり、所謂「くらきは地をおはひ闇はもろく」の民をおはふ」といふが如  
 き狀態なり。未だ目を醒さざるは罪人は縦令外物に關する知識如何に博く  
 有るにもせよ、自己に就きては知るところ無きなり、此點に於ては「未だ其知るべ  
 きはどをも知らざるなり」。彼は己は墮落せる靈魂なるが故に此世に於ける最大の務  
 は其墮落の狀態より挽回して、復び元と創造せられたる神の像を得るに在るを知ら  
 ざるなり。渠はかの精神上の一統の變化、即ち全然たる革新の始めたる洗禮に由て  
 表する「上よりの生れ」、之なくんば何人も「主を見ることなき」靈魂と肉體の聖化の  
 必要を認めざるなり。

凡の疾病に充つると雖も自らは健康なるかの如く思ひ、不幸と鐵鎖とに繋ると雖も  
 も、己は自由なるが如く夢想するなり。惡魔は強き兵士の如く其靈魂を全く擱にせる  
 に自らは「平和上平和よ」と呼ぶ、地獄は渠に逢はんとして起き、一たび入る者を歸  
 へしれたることなき坑は渠を呑まんとして其口を開けるに係はらず、尙ほ惰眠を貪は  
 るなり。火は身邊に燃ゆると雖も渠は之を知らず、其渠を燒かんとするになほ之に  
 留心せざるなり。

此故に寢たる者とは（余は我儕が皆な之を理解せんことを神にのぞむ）己の罪惡と墮  
 落の狀態に在りて、終に神の像を恢復せずして生き、又た死することを満足する者  
 己の疾病も其治癒の唯一の方法も知らざる者、「來らんとする怒より逃れよ」といふ  
 神の警醒の聲に傾聴せざる者、地獄の火の危きに近づけることを認めて其心底より  
 「主よ救はるべき爲めに我何を爲すべきや」と叫ばざる者を云ふなり  
 若し此睡眠者にして敗徳を行に表はす如き者ならざりせば、其眠は通例最も甚  
 しきものなり。其人はかの往昔のラオデキヤの信者の如く「冷かにもあらず熱くも  
 あらず」、其式は靜雅温良にして祖先よりの宗教を教ふる教師たるも、又は熱信固執

にして「我儕の教の中に最も厳しき所に違ひたるパリサイ」的の生涯を送る者たるの如何に係はらず、聖書の所謂己を義とする者、神に受け容らるべき理由として己の義を立てんと勉むる者たる也。

是れ「敬虔の貌あれど實は敬虔の徳を棄て」、且つ他人に之を見る時は己は虚禮虚儀として之を責むるの徒なり。此憐むべき自己の欺騙者は「他の人の如く強索、不義、姦淫せず、また税吏の如くにも有らざるを」神に謝するなり、否な渠は如何なる人に對しても些かの害を加へざるなり。彼は「七日間に二次斷食し」、宗教上の儀式を悉く守り、絶へず教會に出席し、聖餐式に與ぶかり、且つ「獲るもの十分の一を献げ」、力の及ぶ限り凡の善事を行ひ、「律法の義に就ては責むべき所なきなり、渠は敬虔を飲がずと雖も其徳を飲ぎ、宗教を飲がずと雖も其精神を飲ぎ、基督を飲がずと雖も其眞理と生命とを飲ぐ者也。然れども爾曹這般のキリスチヤンは縱令人々よりは如何に高き稱讚を受くるも、神

の前に於ては惡むべき者にして、神の子が昨日も今日も永遠の後までも「偽善なる學者とパリサイ人」に向て宣言し給へる禍の繼嗣者たることを知らずや。渠は「杯と盤の外を潔くして」内は凡の汚穢にて充てる者なり。あしき病は尙ほ渠に附き纏ひて其内は惡にて満てり。主はよくも此の如き者を白く塗りたる墓に比して、外は美はしく見ゆれども内は骸骨と諸々の汚穢にてみてりと云ひ給へり。骨枯れず筋肉之に纏ひ皮膚其上を蔽ふ、然れども其衷には呼吸なく、活ける神の靈なし、而して人若しキリストの靈無くんばキリストに屬する者に非ず、若し神の靈爾曹の衷にをらば爾曹はキリストに屬する者なり。然れども之を有せずんば神は爾曹が今も尙ほ死の中に在るを知り給ふ。

これ茲に所謂寢たる者の他の一種の人物なり。死の中に在れども己れ之を知らず、神に就ては咎と罪との中に死せる者なり、そは肉の事を念ふは死なればなり。聖書に曰く「一人より罪の世に入り、罪より死の來り、人みな罪を犯せば死の凡の人に

及びたるが如し」と。豈只だ肉体の死のみならんや、窮なき心靈の死も亦凡の人に及べり。神アダムに宣はく、爾之を食ふ日には爾は必ず死すべしと。蓋し肉体の死に非ずして（縦令肉体の死すべきものとなりしと雖も）靈魂の死をも云へるなり。これ爾は靈魂の生命を失ひ、爾は神に就て死し、爾の生命も幸福も永く神より離るべしとの意なりしなり。

斯の如くして神と我等の靈魂との根本的の關係は解かれたり。故に我儕は肉の生命の中に在りて今靈の死に在る者なり。而して第二のアダムが我等を生かす靈となり、此世の快樂、富貴、又は功名の裡に死せる者を復活せしむるまでは其死の中に在る者なり。然れども此の如く死せる靈が一旦生き回へるに當りては、先づ神の子の聲を聴くなり、渠は己の迷へる有様を悟り、心の衷に死の宣告を感ず、生くれどもなは神と神につける凡の物には死せる者にして、恰も屍の生ける人の官能を運用すること能はざる如く、生けるキリスチヤンたるの動作を爲すの力なきを意識するなり。

罪に死せる人は靈の善惡を辨別するの知覺を有せざることは最も確實の事なり。目われども視せず、耳われども聴せず。渠は未だエホハの恩恵ふかきを味ひ知らず、昏て神を見、また其聲を聞きしことなく、生命の言葉に接したると莫かりしなり。そゝがれたる香膏の如きイエスの名も没藥、蘆薈、肉桂のかをりみてる其衣も渠には何の効無きなり。死のうちに眠れる靈魂は此の如き物を認むるの力なし。廉耻の心なく是等の事の何をも悟らざるなり。

此故に靈の知覺を有せざる生來のまゝなる人は神の靈の事を受けず、實に靈に由て辨ふことはすべて渠には思かなるものと思ふは靈の事を距ること遠きなり。渠は唯だ靈の事に全く無知なるに満足せずして、却て其存在をすら否定するなり。靈の知覺といふことは渠には愚の極と見ゆるなり。自ら言ひらく「此等の事いかにして有るべき。人いかに我肉体の現在生けるを知るが如くに、己の神の就て生けるを知



るを得んやと。信仰は靈魂の生命也、若し爾の衷に此生命を有たばかの神の與ふる意識、千萬人の證據よりもなほ大なる神の證據—聖靈—は爾に之を證すべし、此外に爾は何の證據を求むるの要なきなり。

若し聖靈爾の靈と共に爾の神の子たるを證すること莫くんば、聖靈は其證と力とに由て爾は未だ眠より覺めざる憐むべき罪人にして惡魔の子たることを爾にさどらしめん。吾が預言する時に今「音および震動ありて骨築まり、骨と骨とあひ聯り、而して氣息四方の風より來り、此殺されし者等の上に呼吸して是を生かさしめんことを望む」(以西結三十七章七、八節)

爾の心を頑にして今來りて爾が神の生み給へる獨子の名を信せざるが故に、爾の罪を悟らしめんとする聖靈に背くこと勿れ。

第二

此故に爾寢たる者よ、目を醒まして死より起よ。神は我口によりて今爾を召び、爾

をして己の墜落せる靈魂たることと、爾の眞狀と、此世に於ける最大の務とを知るべきを命じ賜ふ。爾何の心ぞや、寢たる者よ、目を醒まして起よ。爾の滅亡を免れん爲めに爾の神を呼べ、さらば神は爾を顧み給はん。暴風洪濤爾の周圍に吼りて、爾はもはや滅亡の底、神の審判の淵に沈まんす。爾若し之を免れんと欲せば、神の審判の中に爾の身を投せよ。爾先づ己を審けよ、さらば爾は主より審かれざるべし。

目を覺まして起よ、此瞬間に起よ、「恐らくば爾はエホバの手より其震怒の杯を飲まん」。起つて爾の義なる強き救主を握れ。「爾の身より塵を拂ひ去れ」。少くも神の威嚇をして爾を振肅せしめよ。起きて戦ける獄吏と共に「吾救はるゝ爲めに何を爲すべきや」と叫べ。而して聖靈の働に由りて其賜たる信仰を以て主イエスを信するまで決して休むこと勿れ。

余は爾等の中わが勸むるところに自ら關係無きが如く考ふる人に特に言を寄せんと

す。「吾は神より爾に傳ふべき使命を有てり」。其名に由りて吾は「來らんとする怒より避くべき」を爾に警告す。かの罪に定められて外は獄吏によりて嚴重に其扉を守られたる暗澹たる牢獄の内に、二つの鐵鎖に繋がれて兵士等の間に横臥せるペテロこそ爾の汚れたる靈魂の姿なるなれ。夜は既に更けて刑場に引出さるべき朝近けり。然るに此恐るべき境界に在て爾は熟睡せり、爾は地獄の縁、窮なき亡びの口に於て惡魔の手中に熟睡せるなり。願くは主の使者爾に臨みて光爾の獄屋を照さんことを。而して速かに一起上爾帶をしめ履を納よ、爾の袍を身に纏ひて我に従へ」と言ひつゝ、脅を拊きて爾を覺ささんとする全能者の手を感せんことを。

爾窮なきの靈魂よ、浮世の幸福の夢より醒めよ。神は己の爲めに爾を造らざりしや。然らば爾は神の中に安息を得るまでは安息を得る能はず。漂浪者よ爾の方舟まで飛び歸れ。此世は爾の家に非ずかし。此に幕屋を建てんと思ふこと勿れ。爾は唯だ地上の旅人寄寓者にして漸く變らざる状態(永遠の境を云ふ)に一歩を轉じ始めた

る一日の被造物のみ。疾く急げ、永遠は近けり。永遠の運命は此瞬間に懸れり。幸福の運命も又は不幸の運命も。

爾の靈魂は如何なる状態に在るや。我が斯く語りつゝある間に神若し爾を召し給ふことあらば、爾は死と審判とに逢ふの準備有るか。「目清くして背て惡を觀たまはざる」神の前に立つことを得るや。爾は「光にある聖徒の業の分を受くるに堪る者」なるや。爾は善戰をたぐかひ、守るべき信仰の道を守りしや。爾は必要なる一つのものを得たりや。爾は神の像其義と聖とを恢復せしや。舊き人を脱ぎて新しき人を着しや。爾は現に基督を着るや。

爾の燈には油有るや。心に恩寵をもつや。心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力をつくして主なる爾の神を愛するか。爾はキリスト、イエスの心を有つや。眞實よりキリストチャンたるか。即ち新しき人なるか。舊き人は去りて悉く新しくなりしや。「爾は神の性質を有する」者なるか。爾曹若し棄てらるる者ならずば耶穌、基督は

爾曹の中に在る」を知らざるか。爾は神は其爾に給ふところの聖靈に由りて爾の中に住み、爾亦神に住むことを知るか。爾の身は爾が神より受けたる聖靈の殿なることを知らざるか。爾の産業を確かに受くるの證を爾の心中に有するや。爾は聖靈を受けしや。或はまた聖靈の有ることだに知らずして此問題に驚けるや。

爾若し之に由て礙ぐこと有らば爾はキリスチヤンに有らず。又キリスチヤンたることを望む者にも非ざるを知れ。否な爾の祈禱は罪と變せり。而して受くべき聖靈の有ることだに信せずして、妄りに其感化を祈りて今日畏多くも神を欺けり。去れど神の言葉と我儕の教會の權威とに由りて、吾は爾は聖靈を受けしやといふ問を繰返さるを得ず。若し之を受けざりしならば爾は未だキリスチヤンに非ず。何となればキリスチヤンとは聖靈と力とを以て沃がれたる者なればなり。爾は未だ純潔なる宗教に與づかる者と爲されしに非ず。爾は宗教とは何たるかを知る手。即ち宗教とは神の性質を有すること、人の靈魂に於ける神の生命、心の中に成れるキリスト、

「榮と聖福と純潔とを望む爾の衷に在るキリスト」、地上に始まりたる天、「飲食に非ずして爾の衷に在る神の國」、外形のものに非ずして「惟た義と和と聖靈とに由る歡樂なること」、爾の靈魂に至れる窮なき王國、「測るべからざる神に由れる平和」、「言ひがたく且つ榮光ある快樂」なることを知る乎。

爾はキリスト、イエスに在りては割禮を受くるも受けざるも益なく、惟愛に由て働く所の信仰のみ、惟新生のみ益あることを知るか。爾はかの内部の革新、心靈上の誕生、死より生に移ること、聖と成ること等の必要を認むるか。是なくんば何人も主を見る能はざることを全く確信するか。爾の召れし事と選ばれしことを堅固にせんが爲めに務めて之を覚めつゝあるか。懼れ戰みて教を全うせんとしつゝあるか。窄門より入らんとして闘みつゝあるか。爾は眞面目に己の靈魂を思ふや。而して人の心を洞察し給ふ神に向て、「オー神よ、爾はわが待ちのぞむ所の者なり。主よ爾は渾ての事を知り給ふ、爾はわが爾を愛せんと欲することを知り給ふ」と告げ得るや。

爾は救はるゝことを望む、去れど爾は之を望むべき相當の理由を有するか。爾が人を害せざりしに由るか。或は多の善事を行ひしに由るか。或は他人の如くならず、己は聰明、博識、誠實、善良にして人々より尊敬せられ、好評を博するに由る乎。嗟乎此等は到底爾を神に導く者に非ず、此等は神の前に於ては無用の長物に過ぎざるのみ。爾は神の遣はし給ひし耶穌基督を知るか。爾は「恩に由て救を得るはこれ信仰に由りてなり、己に由りて非ず神の賜なり、行に由るに非ず、此の如くなるは誇る者なからん爲めなり」といふことを學びしや。爾は「耶穌基督は罪人を救はん爲めに世に來り給へり」といふ信すべき言葉を爾の希望の根據として受けしや。「わが來るは義人を招く爲めに非ず、罪人を招きて悔改めさせんが爲めなり」。また「惟迷へる羊の外に我は遣はされず」とは如何なる意なるかを學びしや。爾は「耳ありて聞ゆる者は聴くべし」迷へる者、死せる者、既に罪に定められし者なるや。爾は己の眞價を知るか。己の足らざるを感ずるか。爾は神に對して己の罪を歎げ、人

の慰藉を受くるに堪へざるほど其心貧乏や。放蕩兒たる爾は顧みて「己に歸り」今尚は豆莢を以て其腹を充たせる人々よりは狂氣せりと思はるゝことを以て満足するか。爾はキリスト、イエスに在て敬虔なる生涯を送ることを好むか。是故に好んで迫害を忍ぶや。世の人々は「人の子」を信するの故をもて爾に對して各様の悪言を爲す手。

余は以上の諸問に由て爾が死せる人を醒ましんとする聲を聞き、岩石を打て碎片と成らしむる言葉の鐵槌を感せんことを望む。爾曹若し今日其聲を聞かば、爾曹心を剛愎にする勿れ。精神的の死の裡に寢たる者よ、窮無き死の中に眠ること無からん爲めに目を醒まして起よ。爾の迷へる有様を悟りて死より起よ。先づ爾の朋友親戚を罪と死との中に置き、爾はイエスに従へ。死者をして死者を葬らしめよ。「爾曹此邪なる世より救出されよ」。「爾曹彼等の中より出で、之を離れ、汚穢に捫ること勿れ主爾曹を納ん」而して「キリストは爾を照さん」。

終りに此約束を説明せん、爾曹の中誰にてもキリストの召に従ふ者は必ず彼を失ふことなしとは、如何に我儕に希望を鼓吹するの言葉なるぞ。若し爾今にても目を醒まして死より起きなば、キリストは必ず爾を照さん。」主は恵と榮とを爾に與へ給はん、此世に在ては其恩恵の光を與へ、且つ爾が朽つること無き冕を受くる其時には榮の光を以て爾を照さん。」しかる時は爾の光曉の如くにあらはれ出で、汝の闇は晝のごとくならん。「光に命じて黒暗の中より耀かしめし神はイエス、キリストの面にある其榮光を知らしめん爲めに亦爾の心を照さん。」主を畏るる者には義の太陽祝福を以て之に臨まん、而して爾其日には「起て爾の光を耀かせ、蓋は爾の光爾に臨み主の榮光は爾の上に輝けばなり」と云はれん。キリストは爾に現はれ給ふべし、彼は實に眞の光なればなり。神は光也、神は目を醒まして己を待ちのぞめる罪人を顧み給ふ、而して爾は活ける神の殿となり、キリストは信仰よ由て爾の心に住

み、而して爾は「愛に根せし愛を基として、諸の聖徒と偕に測るべからざるキリストの愛を知り、其潤さ長と深さ高さを識る」に至らん。

兄弟よ爾等各其召を知らん。我等は神の靈に由て神の住み給ふ家と爲らん爲めに、又我等の衷に宿る神の靈に由て聖徒となり、終には光に在る聖徒の業の分を受くる者と爲らんが爲めに召されし者なり。此故に信する我等に與へらるる約束は實に大なるものなり。何んとなれば信仰に由て我儕は諸の約束の總計なる「此世の靈に非ずして神より來る靈を受く」ればなり、これ「我儕が價無くして神より給はるものを知らんが爲めなり」。

キリストの靈とは神が屢次種々なる方法を以て人に約束し、而してキリストが榮を受けし以來豊かに與へ給ふかの大なる寶物を云ふなり。斯くして神は往昔先祖等に爲し給へる左の如き約束を成就し給へり。

吾靈よ汝らの衷に置き、汝らをして我が法度に歩ましめ、吾律を守りて之を行は

しむべし。

(以西結卅六章廿七節)

われ渴けるものに水をそそぎ、乾たる地に流をそそぎ、わが靈をなんぢの子輩にそそぎ、わが恩恵をなんぢの裔にあたふればなり (以賽亞四十四章三節)

爾曹は悉く此等の事の活ける證人として罪の赦、聖靈の賜をあかしすることを得る者なり。若し爾信することを得ば信する者に於て爲し能はざることなし。爾曹の中主を畏れてなほ暗きに歩み光を有たざる者は誰ぞや。我はイエスの御名に由て爾に問はん爾はイエスの救の能力は毫も減却せざることを信するか。彼は今も猶ほ罪人を救ふの力あるを信するか。彼は昨日も今日もいつまでも變らざることを信するか。彼は今地上に於て罪を赦るすの權威あることを信するか。子よ心安かれ爾の罪赦されたり。神はキリストの爲めに爾を赦せり、人の言葉とせず神の言葉として之を受けよ。爾は信仰に由り價無くして義とせられたり。爾は又イエス、キリストに在る信仰に由てきよめらるべし、而して「神は永生を我儕に與へ給へり此生命は

其子に在り」といふことを爾の心に印せらるるに至るべし。

人々兄弟よ、余をして憚無く自由に語らしめよ。暫く、教會の中にて數ふるにも足らぬ如き者の勸に耳を傾けよ。爾の良心は聖靈に在て此等の事の實なるを爾に證すべし、若し其證を有せば爾は主の恩恵深く在し給ふことを味ひたる者なり。惟獨りの神と其遣はし給へるイエス、キリストとを知るは是れ永生なり、此實驗的の智識こそ眞正の基督教なれ。キリストの靈を受けし者はキリストヤンにして、之を受けざる者はキリストヤンに非ず。キリストを受け納れし者にして之を知らずと云ふこと能はず。主曾て曰く「其日(キリスト來り給ふ日)には爾曹われ吾が父に居り、爾曹われに居り、我爾曹にをることを識らん」。是れ則ち「眞理の靈なり、世之を接ること能はず、蓋はこれを見ず、また識らざるに因る、されば爾曹は之を識る、そは彼爾曹と偕に在り、かつ爾曹の衷に在ればなり」と。(約翰十四章三節)。然れ世は彼を受くること能はず、却て父の約束を退けて之を謗り、之を濟がすなり。

ども「凡そイエス、キリストをいひあらはさるる靈は神より出るに非ず、即ちキリストに敵する者の靈なり。此者の將に來らんとする事は爾曹が聞ける所なり、今すでに世に居れり」。聖靈の感動を否定する者、又は人の心にやどる神の靈は凡て信する者に普通なる特權たること、其の福音の祝福たること、その形容の辞なき貴き賜物たること、その普通の約束たること、その眞成キリストヤンの標的たること等を否定する者はキリストに敵する者なり。

爾は「我儕は神の靈の祐助あることを否定せず、唯だ其感動を受くること、其聖靈を受けて之を意識することありといふを否定するのみ。我儕が健全なる宗教に有り得べからずとして否定するは、此靈の感覺、靈の感動、靈に満たさるといふ事のみ、なご云ふとも何の用なきなり。爾は惟だ之のみ否定すと云ふ、然れども之を否定するは爾は聖書の全体、神の眞理、約束及證の全体を否定するなり。我儕の教會は此の如き惡魔的の差別を立つることを知らず、却て我儕は明かに或は

キリストの靈を感ず」と云ひ、或は「聖靈に動かさる」といひ、或はイエスの名の外に我儕が生命と救とを受くべき名無きを知り、又感ずと云ふ。教會は聖靈の感化を蒙らん爲めに、「聖靈に充たされん爲めに」祈るべきを我儕に教ふ、而して其教師等は皆な按手の禮に由て聖靈を受くることを告白する者なり。故に此等の一を否定するは必竟英國々教會と、兼ねて基督教默示の全体を廢棄すると異ならざるなり。然れども「神の智慧は」常に「人には愚かなるもの」なり。されば福音の大なる秘義が今日も尚は往日の如く智者達人に隠れ、徒らなる狂氣の沙汰として殆んど一般に否定嘲笑せられ、而して敢て其信仰を告白する者は、今日も狂人又は狂信家の名を以て呼ばるゝ如きは何ぞ怪むに足らんや。是れ聖書の所謂來らんとする「道を離るゝ事」、即ち人類上一般の背教にして我儕が現に見る如く世に蔓延せる者なり。試みに「エルサレムの諸の街を徘徊し」、心を盡して主なる神を愛し、力を竭くして之に仕ふる人に逢ふかを見よ。我儕の邦は滔々たる不信仰の汎溢の下にいかに嘆くかを

見よ。如何に各種の罪惡が日々に犯さるゝぞ。而かも身顯要の地位に在て罪惡を行ひ、揚々として己の耻を榮とするの輩多く、而して概ね其罰を蒙れるとなきなり。誰か洪水の如く我國に横溢する妄誓、呪詛、不敬、冒瀆と、虚妄、欺騙、惡言と、安息日の破戒、貪食、醉酒、仇恨と、淫逸、姦淫、汚穢と、詭計、不義、壓制、逆遇とを數へ得る者ぞ。

而して此の如く甚しき醜狀に染ますして、純潔に其身を守る者の中にも憤怒、傲慢、怠惰、柔弱、奢侈、放縱、貪慾、野心、名譽の饑渴、浮世の愛、人を懼るゝこと等の如何に多きを見よ。嗟乎此間に於ける眞正宗教の勢力如何に微なる哉。試に見よ、主が我儕に命じ給へる如く、神と隣人とを愛する者何處に在りや。一方には敬虔の貌すら有たぬ者あり、一方には唯だ敬虔の貌のみを有する者あり、一方は開ける墓にして、一方は白く塗りたる墓なり。故に誰にても各處の公會に至りて熱心に之を注目せば、(われは我教會の人々をも除く能はざるべしと恐る、)容易に「一方は

サドカイ人にして他方はパリサイ人」なるを認めん。即ち一方は誕生、天使、靈等を否定し極めて宗教に冷淡なる徒にして、一方は眞の信仰も、神の愛も、聖靈に依れる歡も無く宗教をして生命なき形骸、活動なき儀式典例の塊たらしむる輩なるを認めん。

余は此所に集まる我儕が此の如き部類に屬する者にあらざるを神に望む。兄弟よわが爾曹の爲めに神に願ひ、且つ祈るところは爾曹が此不信仰の汎濫より救はれんことを、滔々たる波浪の底止するに至らんことを是なり。然れども我儕は果して皆以上の如き部類に屬せざる者なる乎。神も我儕の良心も然らざるを知る。爾曹は身を潔く守らざりき。我儕も亦汚れたる惡むべき者なり、辨別の少しく優れる者、靈と眞とを以て神を拜する者は實に稀なり。我儕は亦一心を正うせず其靈かたく神にすがらざる種族たり。神は實に地の鹽たるべきことを我儕に命じ給へり、「されど鹽若し其味を失はば何の益あらんや、後は用なく外に捨てられて人に踐るゝのみ」。



主宣はく、「我此等の事を罰せざらんや。わが靈は此の如き國民に報いざらんや」と。  
 神は何時劔に向て「劔よ此國を行きめくれ」と言ひ給ふべきやを知らず、或は其時の  
 來る速かならんも知るべからず、神は悔改むるに久しき時日を我儕に與へ給へり。  
 今年も亦我儕を許してながらへしめ給ふ、されど神は今雷を以て吾儕を警醒しつ  
 りあり。其審判は地上に治し、而して我儕は最も嚴しき審判を期すること相當の者  
 なれ、聖書に「悔改めて初の工を行はずは我爾に到り爾の燈臺を其處より取除く  
 べし」と云ふ語あり、若し宗教改革の主義と福音の眞理と其單純とに歸ること無く  
 んば、我儕は實に其刑罰を値すべき者たるなり。我儕は今我儕を救はんとする最後  
 の神恩に抵抗しつゝあるやも知る可からず。恐らくは我儕は神の訓戒を捨て、其使  
 者を退くるが爲めに殆んど「我儕の咎の量を充たす」に至れるやも測るべからず。  
 オー「神よ」情の中に憐憫をおぼせ給へ。我儕を亡ぼさず、却て我儕を改むるに由  
 りて爾の榮を彰はし給へ。我儕をして「笞杖と之をおくらんと定めし者」に聽かしめ

よ。「爾の審判は地に治しければ世の民等をして」義を學ばしめよ。  
 我兄弟よ、今は「主の大なる喇叭吹かれて」、我儕の國土が血の洪水と變する前に、  
 眠より醒むべきの時熟せり。願くは永く我儕の目より蔽はるゝに至らざる先きに、  
 我儕の平和を恢復するの道速かに現はれんことを。「オー善き主よ、爾は我儕を回へ  
 し給へ、而して爾の憤を止め給へ。オー主よ地を瞰下して此葡萄樹を見給へ」、而  
 して我儕をして「顧みたまふの時」を知らしめ給へ。我儕の救の神よ、爾の御名の榮  
 の爲めに我儕を助け給へ。御名の故をもて我儕を救ひ、我儕の罪を憫み給へ。さら  
 ば、我儕は爾の聖前より退くことなかるべし。我儕をして生きて爾の御名を呼ばし  
 めよ。萬軍のエホバなる神よ再び我儕を顧み給へ、爾の聖顔の光を照はし給へ。さ  
 らば我儕は全くなるべし」。  
 今我儕の衷に働く所の力に従ひ、我儕の求め、或は考ふるに勝りて行ふことを得給  
 ふ神に、凡の時代を通じて世の終までキリスト、イエスに由りて教會の中に榮有ら

んことをアーメン。

### 聖書的の基督教

（千七百四十四年八月廿四日オックスフォールド大學のために聖メリー會堂よ於て）

「皆聖靈に満たさる。」

使徒行傳四章卅一節

使徒行傳第二章に之と同様の句あり、曰く「ペンテコステの日に至て弟子等みな（使徒、婦人等、イエスの母及其兄弟等を云ふ）心を合せて一處に在りしに、俄かに天より迅風の如き響ありて、彼等が座する所の室に充てり。船の如きもの現れ岐れて彼等各人の上に止まる」。是に於て彼等みな聖靈に満たされ其直接の結果として「聖靈の言はしむるに隨ひて異なる諸國の方言を言ひはじめたり。此音起りしに因りバルテヤ人、メディア人、エラム人および、其他の異邦より來れる人等おほく集りけるが、各人おのが方言を彼等の語れるを聞きて蹶きあへり」と。

同四章を讀むに、使徒等および兄弟等が神に祈り、又は讚美しつゝある間に、「その

集まれる所震動し、みな聖靈に満たされたり」と云ふ句あり。然れども前者に於ける如く見るべき現象此にあらはれしことを見ず。又た「或は病を醫し」、或は其他の異能を行ひ、「或は預言し、或は靈を辨へ、或は方言をいひ、或は方言を譯するが如き」聖靈の顯著なる賜の與へられしことを聞かず(哥林多前書十二章九、十節)。此等の聖靈の賜は凡の時代を通じて教會に與へらるべきか、又は「萬物の改まるん」其時に接して再び與へらるべきかは今斷すべき必要の問題に非ず。然れども教會幼稚の時代に於てすら神は聖靈の賜を頒つに節する所ありしを注意すること肝要なりとす。當時悉く預言者なりしか。悉く異能を行ふ者なりしか。悉く病を醫する能を賜はりしか。悉く方言を語ることを得しか。然らず恐くは此の如き者千人中一人を見ること能はざりしならん。恐らくは惟だ教會の教師と彼等の中の僅々たる少數とに過ぎざりしならん(哥前十二章廿八—三十)。されば彼等がすべて聖靈に満たされしは之より勝りたる目的有りしこと明かなり。

是れ凡の時代に於て凡のキリストヤンに切要の者たるキリストの心と、彼に屬する者に缺く可からざる靈の結べる聖き果とを彼等に與へんが爲め、仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善(加拉太五章廿一—廿四)を以て彼等に充たさんが爲め、忠信、溫柔、樽節を以て彼等に賦せんが爲め、彼等の憤怒と願望とを共に十字架に釘くることを得せしめんが爲め、而して其内部の革新に由て外部の義を全うせんが爲め、キリストの歩みしが如く歩み、信仰に由て行ひ、愛に由て勞し、我儕の主イエス、キリストを望むに因りて忍ぶことを得せしめんが爲めなり(撒前一章三節)。

去れば其等の靈の顯著なる賜に係はる如き珍奇の閉問題に煩はざることなく、我儕の確信する如く凡の時代を通じて存在すべき聖靈の普通の成果、即ち我儕が平生「基督教」なる一語を以て表する人の子弟の間に行はるる神の大なる働を懇るに吟味せしめよ、然れども我が所謂基督教とは神學說の系統、或は教理の組織に非ずして、人の心と生活とに關係する宗教を云ふなり。此基督教を論ずるに當りて便宜の爲め

三つの方面より観察せん。

第一、其個人に成立し始むる方面より、

第二、其一人より他人に傳はり行く方面より、

第三、其地上に貫盈する方面より、

余は明白なる實際的の應用を以て此等の觀察を結ばんと欲す。

第一、

先づ其個人に成立し始むる方面より基督教の起点を考へん。今假りに使徒ペテロが改悔と罪の赦とを宣ぶる説教を聽ける者の一人、其心刺さるゝが如くに罪を感じ、悔改めてイエスを信するに至りしとせん、彼は「望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とする、希伯來十一章一節）神の働に由れる此信仰に依て、直ちにアハ父と呼ぶ子たる者の靈を受けたり（羅馬八章十五）。其イエスを主と呼びしは聖靈に感じたればなり（哥林前十二章三）。蓋し聖靈自ら我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證すれ

ばなり（羅馬八章十六）。彼は今は心底より斯く言ふことを得べし。

「我キリストと偕に十字架に釘けられたり。もはやわれ生けるに非ず、キリスト我に在りて生けるなり。今われ肉體に在りて生けるは我を愛して我が爲めに己を捨てし者、すなはち神の子を信するに由て生けるなりと。（加拉太書第二章二十節）

是れ實に其信仰の精髓にして、父なる神が其愛子に由りて今己に納れ給へる罪人に對する愛に就ての聖き確信なりとす。彼は「信仰に由て義とせられて神と和むことを得たり（羅馬五章一節）。然り心に充る神に由れる平安」——己の信する神を知るに由り、測るところに勝りて渾ての疑惑と恐懼とより其心と意とを潔くせしむる平安——を有するに至れり。此故に彼は「人の惡評を懼れず、其心主を信じて剛健なればなり」。彼は人より加へられんとする禍を懼れず、わが頭髮を數へ給ふ神己を看守するを知ればなり。彼は神が恒に足下に蹂躪しつゝる給ふ闇の渾の權威を恐れず、否な彼は死を懼れず、却て世を逝りて夫の死をもて死の權威を有てる者、即ち惡魔

を滅ばしかつ死を畏れて生涯繋がる者を持たんとするキリストと偕に在らんことを願ふなり(腓立比一章廿三、希伯來二章十五)。

此故に其靈は主を崇め、其靈は教主なる神を樂めり、彼は言ひ難き喜を以て神、即ち父に己を和がしめたるキリスト——その血により贖すなはち罪の赦を得るキリスト——に在りて樂めり。己の靈と共に神の子たるをわかしする聖靈の證據に由りて殊に神の榮を望み、神の榮光ある像を恢復し、義と聖との中に全く新に成ることを望み、「朽ちず汚れず衰へざる嗣業を得んことを望みて」喜ぶなり。

「神の愛はまた彼に賜ふ所の聖靈に由りて、その心に灌漑がるなり」。既に「子たることを得しが故に神その子の靈を彼の心に遣りてアバ父と呼ばしむ」(加拉太四章六)。而して其神に對する孝順の愛は神の寛容の愛をわが衷に實驗する證(約翰一書五章十)に由り、且つ稱へられて神の子たることを得んが爲めに與へ給ふ愛を見るに由りて絶えず愈々生長するなり(約翰一書三章一)。故に神は彼の瞻仰するところ、

其心の喜ぶるところ、此世と來生とに於て其分とするところなり。斯の如く神を愛する者は亦其兄弟を愛せざるを得ざるなり、唯だ言葉を以て愛するのみならず、行と誠とを以て愛せずんばならず。ヨハ子曰く「此の如く神われらに愛し給へば我儕も亦互に相愛すべし」(約一書四章十一)。とエホバはよるづの者に恵あり、そのふかき憐憫はみわざの上にあまねさが如く(詩篇百四十五篇九)凡の人の靈を愛すべきなり。之に準じて此の如く神を愛する者の愛は全人類を包容せり。未だ肉眼を以て相見ざる者も、又は世上の人類は「神の生み給へる者」にして神の子は其人等の魂靈の爲めに死せりといふ外には識るところなき世の人々も、又は邪惡にして恩に感せざる者も、或は更に進んで凡ての敵人——主の故を以て己を惡み、或は迫害し、或は虐待する者——をも除かず、常に其心中にも祈禱にも記憶して忘れざるなり。彼はキリスト我儕を愛し給へる」如くに彼等を愛する者なり。

愛は驕傲らず(哥林前十三章四)、愛は之を有てる人の心をして謙虛ならしむ。故に

彼の眼睛に映する自己は心の卑しき者、微弱なる者、賤陋なる者なり。彼は惟だ神より来るもの外には人より来る讚美を覓めず、又た受くることをせず。柔和、忍耐にして凡の人に接するに温良にして頑硬ならず。忠信と眞實とは曾て彼を離れたることなく、此等のものは「其頸にむすばれ其心の碑に記さる」なり。同一の靈に由りて彼は漸く乳離れせる嬰兒を御する如くに己を制し、渾の事に撻節を守ることを得るなり。彼は世に就ては十字架に釘けられし者、世は彼に就ては十字架に釘けられし者、肉の慾、眼の慾、勢より起る驕傲に超然たる者なり。又た同じ權力ある愛に由りて、情慾と驕慢、淫逸と虚飾、野心と貪婪、キリストに屬せざるすべての誘惑者より救はれたる者なり。

心に此愛を有する者は隣人に對して惡を行ふを好まざるべきは容易く信じ得べきこととなり。故意を以て他人を害するが如きは彼には到底爲し能はざる所なり。彼は残忍、惡行、不義、薄情の行より最も遠く離れたる者なり。同じ憫を以て「其口に

に門守をおきその唇の戸をまもる」べし、蓋し舌を以て義に反し或は恩恵と眞理とに背くことあらんを恐るればなり。彼は渾の虚妄と詭計とを捨て、其口には偽無し、人を惡評せず、不親切なる言葉は曾て其唇より出でしことなし。

彼は「吾無くんば汝は何事をも爲し能はず」といふ聖語の眞理と、絶えず活水を以て澗がるべきの必要とを深く感ずるが故に、人類に神の恩恵を通ずるの溝渠たる神の凡の聖式を常に守るなり。また「使徒の教訓」をまもり心を全く傾けて靈魂の糧を人に教へ、或は己に受くべし。またキリストの體に接はるの道と信する「パンを擘く事」を守るべし。また大なる會衆の捧ぐる祈禱と讚美とに與つかることをつとむべし。斯くの如くして彼は日々「恩に生長し」、能力と神の知識と愛とを増すに至るなり。

然れども單に惡行を避くることは未だ彼を満足せしむるに足らず。其心は善事を行はんとして渴するなり。其心より出づる言葉は常に「我父は今に至るまで働けり我

も亦働く。「我主は周く廻りて善事を行へり、我も亦其跡を履まざらんや」といふ語なり。此故に機會に應じて若し高尚なる種類の善事を行ふことを得ずんば彼は饑ゑたる者に食はせ、裸かなる者に衣せ、孤者或は旅人を扶け、病める者を訪ひ、獄に在る者を恤み、貧しき者を養はんが爲めに凡の持てる物を與へ、彼等の爲めに勞苦するを樂とし、他を益し得ることならんには喜んで自ら節するなり。「既に爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり」。(馬太廿五章四十)といふ主の言を記憶して、彼等の爲めならんには何物をも惜まざるなり。

此の如きは實に初代の基督教なり。此の如きは昔日のキリスチヤンなり。此の如きはかの祭司長及長老等の恐喝を聞きし時に一心を合せ神に對ひて聲を揚げ而して悉く聖靈の満たされし人々なり。此等の衆の衆の信者はみな心を一にし意を一にせり、蓋し彼等が信するキリストの愛は彼等を勵まして此の如く相互に愛するに至らしめしなり。誰一人その所有を己が物といふことなく、凡て之を共に有てり、此の如く彼

等は全く世に就ては十字架に釘けられ、世は彼等に就ては十字架に釘けられしなり。「彼等は常に使徒等の教訓をうけ、交をなし、パンを擘くことと祈禱とを務めり」。(使徒行傳二章四十二)「彼等はみな大なる恩を蒙れり、其中に二人の窮乏者もなかりき、蓋は地所或は家を有てる者は其を售りて其售りし所の價を挈來り使徒等の足下に置きこれ各々の用に從ひて各予へしが故なり」。(使徒行傳四章三十一―卅五)。

第二、

我儕は第二に基督教が一人より一人に傳はり、次第に蔓延する方面より之を觀察せん。蓋し燈を燃して斗の下に置くことなく。燭臺に置きて家に在るすべての物を照すは神の聖旨なればなり。主は實に初代の弟子等に之を命じ給へり、曰く「爾曹は地の鹽なり」、「世の光なり」と、又同時に一般の命令を與へて曰く「此の如く人々の前に爾曹に光を耀かせ、然れば人々爾曹の善行を見て、天に在ます爾曹の父を榮むべ

し。』と(馬太五章三十三六)。

假りに此等人類の博愛者たる僅少の人が「全地が罪惡の中に沈淪」するを見るもせよ。彼等は此の如き光景を觀て、即ち主として死するの己むを得ざるに至らしめたる不幸、慘憺の状態を察して、冷々淡々たるべしと信じ得べきか。彼等の臟腑は爲めに苦悶せざらんや。彼等の心腸は爲めに溶け了せざらんや。假令彼等の愛する主より命無きにせよ、手を袖にして終日之を傍觀するを得んや。彼等は如何にして火中より燃木の幾分をも引出さんとして務めざらんや。彼等の之を欲するは疑なけん。彼等はまさに迷へる隣むへき羊を其靈魂の牧者監督に歸さんが爲めには如何なる苦辛をも惜まんや(彼得前書二章廿五)。

古へのキリストチヤンは此の如く行へり。機會あれば衆のみに善を行ひ、來るべき怒より避くべきを勧め。今地獄の刑罰より免るべきを警告せり。彼等宣言して曰く、「往昔に昧昧かりし時は神これを不問に爲し給ひしが、今は何處の人にも悔改むるこ

とを命じ給ふ」(使徒傳十七章三十)と。又叫んで曰く、「爾曹はなんぢ等の惡しき道より回れ、然らば惡汝等を蹟かせて滅ぼすことなかるべし」と、(以西十八章卅)。彼等は世人に向て「擲節と公義と」に就き、世人を支配する罪惡に反對なる徳義に就き、「來らんとする審判」に就き、神世を審き給ふ其日には確かに惡を行ふ者に臨むべき神の怒に就きて論せり(使徒傳廿四章廿五)。

彼等は各人の状態の必要に従て語ることを務めり。黑暗の境、死の蔭に在りながら恬然として尙ほ自ら悟らざる人々に向て絶叫して曰く、「爾寢たる者よ、目を醒まして起よ、キリスト 蔭を照さん」と。然れども既に眠より醒めて神の憤を豫想し、戦々競々たる人々に向ては宣言して云はく、「我儕の爲めに父の前に保惠師あり、彼は我儕の罪の挽回の祭物なり」と。而して既に信する者には愛と善行とに進み、絶えず忍んで義を行ひ、主に見ゆんが爲めに必ず先づ要すべき聖潔の徳に益々充つるに至らんことを奨勵せり(希伯來十二章十四)。



彼等の勞作は主に在りて空からざりき。主の言葉は愈々盛んに行はれて榮を得たり。然れども罪惡も亦同様の勢を以て瀾漫せり。世人は「彼等の行ふ所は惡しと説せらるゝが故に一般に礙けり(約翰七章七)」。快樂を追ひ求むる人は礙けり、そは此等の人々は唯だに其思想を難んせられしのみならず、(彼等曰く彼は神を知れりと稱し、自ら神の子なりと呼ぶ、其生活は他の人々の如くならず、其道は世の人々と異なれり、彼は汚穢の物を避くるが如く、我儕の道をさけ、神は己が父なるを誇ると、)そは彼等の多の同輩が彼等より離れて、もはや彼等と偕に放蕩の極に趨らざるに因りてなり(彼得前書四章四)。「名譽を追ひ求むる人は礙けり、そは福音の道擴張するど共に彼等が人々の尊敬を受くること衰へたればなり。多の者は彼等に阿諛の贊辭を呈し、又は神にのみ歸すべき崇敬を人に致すことを廢したればなり。利を事とする者は己が類の者を集めて云ひけるは、「人々よ我等の富めるは此業に藉れること爾曹の知るところなり、然れども此等の人衆の人を誘惑せることは爾曹が見るところ、聞くところなり、此は我等の業の輕しめらるゝ危あり」と、(使徒傳十九章廿五)。

就中宗教を事とする者所謂教外の宗教家「世の聖徒等」は礙けり、而して機會あれば將に斯く言はんとす「イスラエルの人々我儕を助けよ、蓋はわれら此人々を見るに疫病の如し天下の人を擾せり、(使徒傳廿四章五)。此人々は遍く教を傳へ、この民と律法と此處に逆ふ者なり、(同廿一章廿八)」と。

滿天時に黒雲に蔽はれ、風雨烈しく起り來るは、之が爲めなりしなり。蓋し基督敎の蔓延するに従つて、之を納ざる僭輩の妨害を加ふること愈々甚しく、所謂「天下を亂す者」等(使徒傳十七章六)に對して慣れる者益々増加し、相叫んで「此の如き者どもを地より除き去れよ、彼等は生きながらふべき者に非ず」といひ、而して誰にても彼等を殺す者は神に仕ふる所以なりと確信するに至りたればなり。

彼等は基督信徒の名を惡しとして棄つることを怠らず(路加六章廿二)。故に何處にても此宗旨は誹られたりき(使徒傳廿八章廿二)。人々は往昔の預言者に於ける如

く、彼等に就きて各様の悪言を云へり(馬太五章十二)。夫れ何事にても一人の肯定せんとする所は他人の信せんとする所なり。故に過は天の星の如く多くなり、父の豫め定め給へる時に於て、迫害は千種萬様の形を爲して起れり。或者は暫くの間唯だ耻辱と詆評とを蒙れり、或者は所有物を奪ひ去られたり、或者は嬉笑をうけ、鞭打られたり、或者は縲紲と、囹圄の苦を受けたり、或者は血を流すに至るまで抵抗せり(希伯來十章卅四、十一章三十六等)。

今や地獄の支柱は震ひ動きて、神の國は益々擴張せり。罪人は何處に於ても關より光明に移り、サタンの権力より神に復れり。神は凡て敵ふ者の抵抗し能はざる如き口と智慧とを其子等に與へ給へり。而して彼等の行は其言に一致して同じく力あり。然れども彼等の苦難は何よりも勝りて彼等を天下に現はせり。即ち彼等は「凡の事に於て神の役者の如く行ひて、己の義を人に顯せり、すなはち多の忍耐にも患難にも、窮乏にも、困苦にも、責打るるにも、獄に入れらるるにも、擾亂の時にも、

勤勞にも、海中の難にも、野の中の難にも、疲勞と苦痛とにも、饑渴と凍餓とにも、其義を顯せり」(哥林後六章四)。而して信仰の善戰をたぐかひて、羊の如く屠所に曳かれ、其信仰の犠牲として捧げられし時に、其滴れる血は彼等の爲めに發言せり。乃ち異教人をして嘆せしめて曰く、「彼は死にたれども尙ほ語る」と。

斯の如くして基督教は天下に弘布せり。然れども稗子の麥と共に現はれ、敬神の奥義の行はるる如く罪惡の奥義の働くと何を迷かなるや。「婦は野に逃れ」而して「信仰厚きものは人の子等の中より滅ばさるるに至るは也」、サタンが神の殿の裡にすら己の所を見出すことの何ぞ速なるや。これ架空の想像に非ずして世上の事實たるなり。即ち次第に増長し來れる世の腐敗は神が其教會を磐の上に建て陰府の門は到底之に勝つべからざることを示さん爲めに時代より時代に渡りて斷絶す起し給へる證人等の描く所たるを如何せん(馬太傳十六章十八)。

第三、

我儕は此等よりも大なる事を見ざらんや。世の開闢以來未曾有の大事を見ざらんや。サタンは神の眞理を失墜せしめ、又は其約束を無効のものたらしむることを得るか。彼れ若し之を能くせずんば基督教は全勝を博して地を蔽ふの日來らんとす。我儕は先づ暫く立つて提出せる第三件即ち「基督教の世界」なる此異觀を視察せん。古への預言者等は之に就きて熱心に研究し詮索せり(彼得前書一章十、十一節)、彼等の衷に在る靈は之に就きて證して云はく、「するの日とエホバの家はもろくの山のいたいに堅く立ち、諸の嶺よりも高く擧り、すべての國は流の如く之につかん、斯くて彼等はその劔をうちかへて鋤となし、その鎗をうちかへて鎌となし、國は國にむかひて劔をあげず、戰鬥のことを再びまなばざるべし」(以賽亞二章四、二)と。「その日エツサイの根たちてもろくの民の族となり、もろくの邦人はこれに服ひきたり、榮光はそのとゞまる所にあらん、その日主はまたふたゞび手を伸べてその民ののこれる僅かのもを贖ひ給ふべし。エホバは國々の爲めに族をたてよイスラ

エルの逐やられたる者をあつめ、地の四極よりユダの散失せたる者を集ひたまはらん」(以賽亞十一章十一、十二)「狼は小羊と共にやどり豹は小山羊と共にふし小羊小獅子は肥るたる家畜と共に居りてちひさき童子にみらびかれ、牝羊と熊とはくひものと共にし、熊の子と牛の子と共にふし、獅はうしの如く藁をくらひ、乳兒は毒蛇の洞に戯れ、乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん。斯くてわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん、そは水の海をおほへる如くエホバをしの知識地にみつべければなり(以賽亞十一章六、九)。

大なる使徒パウロも亦同じく之に説き及べり。而してこれ實に未だ成就に至らざるものなり、曰く「神は其民を棄てしや決して然らず、反て彼等が錯失により救は異邦人に及べり。而して其衰は異邦人の富とならんには況して彼等の盛んなるに於てをや。兄弟よ我爾曹が自己を智とする事無からん爲めに此奧義を知らざるを欲せず、即ち幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈つるに至らん時まで也」と(羅馬書十一

章一、十一、十二、廿五、廿六。

試に今は其時熟して預言當りに應驗せんとするの期なりと假定せよ。光景果して如何なるべき。すべての物は平和なり」とこしへの平穩とやすきとなり。此處には「すべて亂れたるかゝ兵士の上るこびと血にまみれたる衣」無く、「荒廢はとこしへに止み」戰は地上より絶ははてるべし。また内部の不和存することなく、兄弟は兄弟に逆ふことなく、國又家は自ら分れて己の臟腑をかき破ることなし。内亂は遠しへに止みて誰も隣人を亡ぼし又は傷ふ者あることなし。此處には「賢き者さへも狂せしむる」が如き壓制行はるることなく、「賢き者の面をすりやぶる」が如き凌辱なく、強奪又は不義あることなし、凡の者其持てる物を以て足れり」とすればなり。斯くして「義と平和とたがひに接吻せり」(詩篇八十五篇十節)、此二つのものは「根つぎて地に盈ち」義は地にさかたて平和は天より之を眺めん。此處には正義は慈悲と共に存し、地はもはや慘酷なる家にもつることなし。主は殺伐惡意の人、嫉妬復讐の人

を滅ぼせり。たどへ怒を發すべき場合にも惡を以て惡に報いんとする者なく、實に惡を行ふ者一人もあることなし。そは凡の人鶴の如く柔和なればなり。信仰に由て平和と歡樂とに満ち、一の靈に由りて一体と成り、凡の者兄弟として相愛し、悉く同一の心と同一の精神を有せり。「誰一人己の所有を以て我ものと言ふ者なく」、互に己の如く其隣人を愛するが故に彼等の中乏しき者一人もあることなし、而して凡の者みな「爾曹人にせられんと思ふことは人にも其如くせよ」と云ふ一の規約に遵ふて行ふなり。

彼等の間には如何なる不親切の言葉も如何なる喧嘩爭論の聲も、如何なる説謗誹讒の音も聞ゆることなく、却て各人「口を啓けば知慧をのべ、仁愛の教誨其舌に在り」。人を詐るは等しく彼等の爲し能はざる所る、其愛には偽善なく、其言葉は常に其思想の眞實なる發現に有らざるはなし、試に肺腑を披いて其心を察せば只た愛と神とのみ其所に存することを認めん。

斯の如く全能なるエホバの大なる能力を以て治め給ふ處には「萬物を己に服はせ」、  
 愛を以て凡の人の心に溢ふらせ、讚美を以て凡の人の口に充たしめんとす。「かゝる  
 状の民はさいはひなり、エホバをおのが神とする民はさいはひなり」。(詩篇百四  
 十四篇十五)エホバ宣はく「起上光を放て、なんぢの光きたりエホバの榮光なんぢの  
 上に照り出でたればなり。なんぢら我エホバなんぢの救主なんぢの贖主ヤエブの  
 全能者なるを知れり。われなんぢの施政者をおだやかにし、なんぢを役するものを  
 義せり。強暴のことも再びなんぢの地にきこせず、殘害と敗壞とはふたゝびなんぢ  
 の境に聞せず、汝その石垣を救ととなへ、その門を譽ととなへん。なんぢの民はこ  
 どくく義者となりて遠へに地を嗣がらん。かれはわが植ゑたる樹株わが手の工わが  
 榮光をわらはす者となるべし。晝は日ふたゝび汝の光とならず、月もまた輝きて汝  
 を照さすエホバ永遠になんぢの光となり、なんぢの神はなんぢの榮とありたまはん」  
 (以賽亞六十章一、十六—十九、廿一)。

第四、

以上基督教發達の端緒より進んで世界に貫盈する有様を略述したれば終りに明白な  
 る實際上の應用を以て全体を結ばんとす。  
 余は先づ試に問はん、此の如き基督教現今何處に存するや。基督信者何處に生活す  
 るや。人民悉く聖靈に満たさるゝ邦國何處に在るや。凡の者皆な同心一意なりや。  
 乏しき者を等閑に附することなくして絶えず人々の必要に應じて之に與ふるや、す  
 べて皆な神の愛に充たされ其愛に酬まされて己の如く隣人を愛するや、すべて皆「慈  
 悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣る」者なるや、すべてみな言に於ても、行に於  
 ても、正義と慈悲と眞理とに逆ふことなく、凡の事に於て己れ人にせられんと思ふ  
 ことを凡の人に爲す者なるか、是等の條件に答ふる能はざる處と正に基督教國と稱  
 ふることを得べきか、然らば我儕は未だ地上に一の基督教國を見ざることを告白せ  
 るべからず。

兄弟よ神の憫恤によりて、たゞひ爾は余を稱して狂人又は白痴となすも暫らく余を忍ばんことを求む。何人か明白なる言葉を以て大膽に卿等に警告するの必要あり、殊に現今を以て尤も必要なりとす、蓋しこれ最後の時ならざるや否やは測る可からざる所なればなり。誰か正しき審判者が何れの日「我はもはや此民の爲めに求むる祈をさくに堪へず」と云ふを知る者ぞ。」たゞへノア、ダニエル、ヨブの徒此地に在るも彼等はたゞ漸く己等の靈魂を救ふに止まらん。余若し之を爲さずば、誰か明かに此警告を爲す者ぞ。故に余は敢て口を啓かんとす。余は活ける神に由て爾曹が我が手より祝福を受けざらんとして爾曹の心を頑にすることなからんことを切望す。爾の心中に語りて「君の勧めはたゞひ誠に我等を心服せしむるところありと雖も未だ我等を制するに足らず。」又は換言せば主よ爾は爾の遣はせる者を遣はすべからず、此人に由りて救はれんよりは、寧ろわれをして我血によりて亡ぼさしめよといふこと勿れ。

兄弟よ「我かくいへど爾曹が此れに愈れることを深く信せり」。されば余をして柔和なる愛と温良なる心とを以て爾に問はしめよ、此市は基督教の市なりや。基督教、聖經的の基督教は此に見ることを得るか。我儕はみな「聖靈に満たされ」て心に之を樂み、行に其聖靈の純良なる果を顕彰する者なるや。凡の有司、凡の學校と教院の長及其社會(先づ一般の市民を措いて)は「みな心を」にし意を「にする」者なるや。「神の愛は我儕の心に灌がれしや」。我儕の心術は基督の有せる心術なるや。而して我儕の生活は其心術に應ずべきものなるや。我儕はわれらを「召し給ふ聖者に效ひて凡の行を潔く」せるものなるや。余は爾曹は今格別考察を要する小問題を有せるに非ず、爾曹の前に置かれたる問題は、曖昧なる學說に係はるか如きものに非ずして、明々白々たる我儕の基督教の根本に係はるものなるを注意せんことを切望す。余は爾曹が神の言葉に導かれたる其の良心に訴へて之を判断せんことを欲す。而し

て自ら己の良心に責めらるゝことなき者は自由に行け。

されば恐れかしくみて、暫くせば爾も吾も其壘前に立つべき大なる神の聖前に於て、余は我儕の上に權を有する、其官職の故を以て余の敬重する爾曹が（神を伴る者に效ふことなく）眞面目に各々「聖靈を以て満たさるゝや」否やを省みんと祈る。爾曹は眞に召されて人々の中に代表すべき其神の活ける肖像なるか。聖書に曰く「我いへらく、なんぢらは神なり」と、爾曹有司と行政者とよ、爾曹は其官職に由て此の如く近く天の神に關係する者なり。爾曹は其種々なる地位と位階とに在て我儕に「我儕の治者なるエホバ」を顯はすべき者なり。すべて爾曹の心の思と、爾曹の心術と希望とはその高尚なる使命を負ふ者たるに適當するや。すべて爾曹の言葉は神の口より出づるものゝ如くあるや。すべて爾曹の行ふところに威儀と愛と存するや。蛆の如き人、蟲のごとき人の子」たるの性質を有すると共にたゞ神に充てる心より流れ出づるを得べき言を以て形容し能はざる偉大を有するや。

爾曹殊に青年を薫陶し、其蒙を披き其迷を正し、之を養成して救を得るまでに賢からしめんとするの任務を負ふ者よ、爾曹は「聖靈を以て満たされしや」、爾は爾の重職に尤も切要なるすべて「靈の結ぶところの果」を以てみたまはれしや。爾の心は神に由て健全なりや、地に其國を建てんと欲するの愛と熱信とあるや。爾は絶えず我儕の學問の惟一正統の目的は「只だ一人の神と其道はし給へるイエス、キリストを知り之を愛し之を奉ふるに在るを思ふか。爾は日々唯だ愛は永久に亡びることなく、（たとへ方言は思ひ、知識も亦廢るべしと雖も）愛なくんば凡の學問は唯だ虚飾せる無知と、騙れる愚と、煩はしき心思となることを彼等に懇誨するや。爾曹の教ふる所は實際に彼等をして神を愛し、また神の爲めに博く人類を愛せしむるの傾向を有するや。彼等の學問の種類と方法と程度とに關はる爾曹の計畫に於て常に此目的を失することなきか、此等年少氣銳のキリストの兵卒等が如何なる境遇に投せらるゝとも、みな凡の事に於てキリストの福音を飾る輝ける明星爲らしめんことを希望

しつゝ勵み勉むるや。請ふ余をして爾曹に問はしめよ、爾曹は爾曹の企圖せる大なる事業に其全力を傾注するや。之が爲めに爾の意を盡くし、精神を盡くし、神が爾に賦與せる才能をつくし、爾の能力をつくすや。

余を以て爾曹の監督の下に在る青年は、みな傳道者を志す者なりと思ふと誤解する勿れ。然らず、余は彼等はすべてキリストチャンたらんとする者なりと思惟して語るのみ。吾儕の祖先の恩恵を享有する吾儕は、如何なる模範を彼等に現すや、「フエロ」學士、教授、殊に或る位階と尊貴とを有する者は何如なる模範を彼等に示し得るや。兄弟よ、爾曹は謙遜、克己、眞實、平和、忍耐、溫柔、嚴肅、樽節等の靈の結ぶ所の果に充つるや、絶えず休むことなくして凡の人に善事を行ひ、其肉体の窮乏を救ひ、其靈魂を神の眞の知識と愛とに導かんとして勉勵するや。此れ實に「フエロ」等の一般の特色なるか。余は其然らざるを恐る。却て吾儕は傲慢と驕傲と、短氣と癡癖と、怠慢と惰氣と、貪食と放恣と、更に無益とを以て随分相當の理由に

よりて非難せらるることなかりしや。嗟呼神は我儕より此の如き譏を除かんと、其記憶さへも遠へに我儕より消へ去らんことを。

我儕の中の多くは聖き事に仕へんが爲めに他よりも一層專一に神に獻身せる傳道者なり。然らば我儕は「言と行と愛と信と潔とを以て他の模範となる」者なるや。(提摩太前四章十二) 我儕の類と心とは「エホバに聖し」と記されしや。我儕は如何なる動機より此聖職に就けりしや。實に心を專にして「心より聖靈に動かされ、神の榮を進め其民の徳を建てんが爲めに此聖職に就けることを確信して」神に仕ふる者なるや。而して我儕は「神の慈に由り此聖職に全く我儕の身を捧ぐることを決断せるや。我儕はすべて我儕の中に存する世に屬ける思慮と考察とを悉く擲擲せるや。我儕は全く此一事に専心して凡の思慮と考察とを之に集注するや。我儕は人を教ふるに足る者なるや。人を教ふることを得んが爲めに先づ神より教へられたるか。我儕は神を知るか。我儕はイエス、キリストを識るか。「神は我儕の中に其子を現は



し」給ひたるか。而して神は「我儕をして新約の役者となるに足る」者と爲らしめたるか。然らば「我儕の使徒たちの印」は何處にあるか。誰か咎と罪との中に死せる者にして、我儕の言葉に由り死より生に復されたる者あるか。我儕は人々の魂の爲めには屢次寢食を忘るゝに至るはと死より之を救はんと欲するの熱信を有するや。我儕は明かに語り「眞理を顯はして神の前に己を衆の人の良心に質す」ことを爲すや。我儕は「凡て我儕の財寶を天に蓄へん」が爲め此世と此世の物とに死せるや。我儕は神の産業を主る者なるや。又は我儕は最微小なる者、凡の人の僕なるか。我儕がキリストの譏を忍ぶ時心苦しく之を感ずるや。又は之を喜びとするや。我儕が左の頬をうたるゝ時之を憤るや。我儕は侮辱を忍ぶ能はざるか。又は我儕は右の頬をもひけて惡に敵らふことなく、善を以て惡に勝たんとするか。我儕は道より乖ける人々を如何にもして救はんと欲するの劇しき熱信を有するか。又は我儕の熱信は柔和と謙遜と溫柔との智慧の言葉とを以て人を勧むるの愛の相なるか。

更にまた我儕は此處に在る青年諸氏に就て何を言ふべきか。爾曹はキリスチヤンの敬虔の貌を有つか、將たまた其能力を有つか。爾曹は謙遜にして喜んで人の訓戒を容るゝ者なるか、或は頑硬執拗にして躁暴自尊の者なるか。爾曹は兩親に仕ふるが如くすべて爾曹の長上に事ふるか。又は爾曹は尤も柔和なる敬愛を致すべき人々を輕んずるか。爾曹は平生の業務に精勵し、力を盡くして學問を攻究するか。爾曹は毎日適度の業をつとめて時間を利用するか。却て爾曹は少しも教に益する所なき雜書、或は遊戯に耽り、又は其他の徒らなる事に荒みて毎日貴重之光陰を費しつゝあることを自覺せざるか。爾曹は時を整ふるよりも寧ろ財を理むるに巧なる者なるや。爾曹は確乎たる主義を以て如何なる物をも人に負はざらんと心掛るや。「聖日を記へて聖く之を守り」、平日よりも一層近く神に交はらんが爲めに之を費すや。爾曹神の家に在る時神其處にいまし給ふことを思ふか。「見ゆる神を見るが如く」に仕ふるか。爾曹は「各々己の體を得て之を潔く貴くなして用ふることを知る」か。醉酒と淫蕩

とは果して爾曹の中に行はれざるか。「己が耻を榮とする者」爾曹のうちにあらざるか。爾曹の多くの者は悲み或は懼るゝともなく常に「妄りに神の名を稱へざる」か。爾曹の中に猥りに誓ふ者多くあらざるか。余は此の如き者著るしく繁殖しつゝあるを恐る。兄弟等上之を怪とする勿れ。余は神と會聚の前に在て、余も亦曾て此の如き徒の一人にして、當時知ることだになき慣例と、當時も數年の後までも讀むことだにせざる法例を守らんことを嚴肅に誓へる者なりと告白す。若し之をしも妄誓と云はずして將た何とか云ふべき。然れども此れ果して妄誓ならば我儕はいかばかり大なる罪を負ふ者ぞ。而して至高き神は之を黙視し給ふべきや。爾曹の中の多くは神に對し、人に對し、また己の靈魂に對して嚴肅の心なき戲謔者の類たるは之が爲めならざるか。爾曹の中に毎周密室の祈禱に一時間を費す者幾許あるや。爾曹の談話に神の思想の趣味を有する者幾許あるや。爾曹の中誰か些かなりとも聖靈の働、人々の心に於ける其超自然的のわざを知る者ぞ。爾曹は時々教會

に於ける外に聖靈の事を談ずるを忍び得るや。若し或人此の如き談話を始めば此れ偽善なり、然らずんば狂信なりなどゝ妄なる獨斷をせざるか。余は全能なる主なる神の名に由て問ふ、爾は如何なる宗教を有するや。爾曹は基督教の談話すら爲す能はず又た爲すに堪へず。嗟乎我が兄弟等よ此れ何如なるクリスチャン市なるや。主よ今は爾の御手をつけ給ふべき時なり。如何んとなれば(人事の上より語れば)基督教、聖經的基督教の再び此地の宗教となり、我儕の中の凡の階級の人々「聖靈に満たされ」たる人々の如くに語り、また行ふべき望何處に在るや。此の如き基督教誰に依て挽回せらるべきぞ。權威を有てる爾曹なるか。然らば爾曹はこれすなはち聖經的基督教なるを信するか。爾曹は之を恢復せんことを欲するか。之を挽回するの器とならんが爲めには爾曹の財産、自由、生命等を惜まざるの覺悟あるか。假りに此希望を有するも誰か其大業に相應なる能力を有する者を恐らくは爾曹の中僅かに之を企たて、殆んど其功を見ざる者

もあらん。然らば基督教は無名の青年に由て挽回せらるべきか。余は爾曹が之を忍び得るや否やを知らず。爾曹の中斯く叫ぶ者なかるべきか、「青年よ、爾は此の如く行ふて我儕を辱むるなり」と。然れども爾曹はもはや證據を示さるゝまでもなし、何となれば罪惡はかく洪水の如く我儕の中に汎濫すればなり。然らば神は我儕をして初の愛に還さしめんが爲め誰を遣はし給ふべきや、飢饉なるか、(神が有罪の地に送る最後の使者たる)疫病なるか、將た又た「異邦人の陣」なる羅馬教徒たる) 劔なるか。否な「オー主よ、寧ろ我儕をして爾の御手に陥らしめよ、願くは人の手に陥いらしむる勿れ」。

主よ救ひ給へ、然らざれば我儕は亡びんとす。我儕が洗ひとなからん爲めに泥より揚げ玉へ。此等の敵より我儕を助け給へ。そは人の助は空くすべければなり。凡の事爾に能はざる所なし。願くは爾の大なる力に由りて死の運命に逼れる夫等の人を保ち給へ。我等の意に非ず聖意に従ひて爾の適當とし給ふ方法を以て我儕を助け給へ。

信仰に由て義と稱せらるること

工なき者も不義なる者を義とする神を信じて其信仰を義と爲られたり

羅馬書四〇五

(一) 如何にして罪人が萬有の主にして審判者たる神の前に義と稱せられ得るやとの問題はあらゆる人の子に取りては極めて緊要なる者なりとす。此の義と稱せらるゝことや實に我儕が凡ての希望の根元たり、何となれば我儕が神と敵たる間は一瞬時にも永遠にも我儕の衷に平和と歡樂とある能はざればなり。夫れ我儕が心我儕を責むるに、いかで平和なる者の衷に在ることを得べけんや、況んや「我儕が心より大なるにより凡の事を知り給はざることをなき」神の前に在て惡んぞ能く心を安んずることを得んや。「神の怒われらが上に歸る」に、いかで歡樂の此世にも、又來るべき世にもあり得べけんや。

(二) 然り而して古來此重要なる問題を諒解したる者甚だ少し。之を諒解せんとして却て之を混亂したる者亦頗る多しとなす。否管に之を混亂せしのみならず、全く其義を誤り、明の暗と相異なる如くに眞理に乖反し、絶對に神の論と信仰の眞意とに鑿柄相容れざる誤説を爲せしこと數ばなりとす。かく此希望の根元基礎を誤り解するが故に彼等は遂に此上に築き構ふることも能はざりき、彼等は之れを築き得るとも「金銀寶石」の火にて試みらるゝ時耐へ得るものを以てせずして、唯「木草禾稊」の神には享けられず、人には適せざるものを以て之に建てんとはせりき。

(三) されば予は此問題の極めて緊要なることに應じて予が能ふだけ誠實に眞理を求むる人々の爲め、言詞の無益なる論争より救ひ數多の人の既に誤られし考説の混亂を明白にし、この敬虔の大秘義の眞實的確の意見を彼等に示さんが爲めに――  
 第一には此稱義てふ教理の大根元は何ぞや、  
 第二には稱義とは何ぞや、

第三には義と稱せらるゝ所の者は如何なる人なりや、及び  
 第四に如何にして彼等は義と稱せらる可きや  
 を説明すべし

第一。予は先づ此稱義てふ教理の大根元は何なるか、之を説明せんと欲す。  
 夫れ人は神の像に象りて造られたり、すなはち之を造りし者の淨聖なるが如く淨聖に萬有の主宰の矜恤深さが如く矜恤深く、天に在す其父の完全なるが如く完全に造られき。神は愛なれば人は愛に居り、神に居り、而して神もまた人に居る。神は「その永遠の像」即ち榮光の神の朽ちざる肖像たらしめんとて人を造り玉へり、故人は神の潔さが如く潔くして毫も罪の汚なかりき。彼は惡てふものを其種類に於ても其程度に於ても知らず、心内身外共に罪なく穢なかりき。彼は實に「心を盡し意を盡し精神を盡し力を盡して其主なる神を愛し」たりき。  
 かく正義完全なる人に神は一の完全なる律法を賜ひき、此律法を彼は絶對の從順

を以て遵奉することを要められき。彼はすべての事に絶対の従順を要められ、而して彼が活ける人となりし時より、其試の日の終を告ぐるまで一瞬の間断もなく斯く従順にあるべかりし。而して此従順の徳に聊かにても缺くことあらんか之が制裁なるものは存せざりき。げに制裁なるものゝ必要はあらざりき、何となれば人は其命せられ定められたる事物に堪能にして、あらゆる嘉言善行を爲すに全く適せるものなりければなり。

彼が心に記るされたる愛の全法令に（恐くは彼は直接に之を犯すこと能はざりしならん）神は「園の中にある樹は汝其果を食ふ可らず」とてふ一條の積極的刑科を増加し（また汝食ふの日には必ず死す）と云へる罰を付するを可とし玉へり。  
 是れ實に當時樂園に於ける人の状態なりき。神の自由にして大なる愛によりて、人は潔く福なりき、彼は神を識り、神を愛し、神を喜びたりき、而して是は實に彼の窮りなきの生況なりき。此愛の生況は若し彼にして事々物々断せず神に順ひ居たらんには限りなく繼續すべく、若し一にても不順の事あらんか、彼はすべてを禱はるべきなり。神宣はく「其日には汝必ず死ねばなり」と。  
 人は遂に神に乖たりき。彼は「神が食ふ勿れと命じたる樹の果を食ひたり」。而して其日彼は神の義しき審判によりて罰せられたり。又嚮に警告せられし宣告は彼其日より之を受けざるを得ざりき、即ち彼はその樹の果を食ひし時既に死せりしなり。彼の靈魂は死せり、神より離れたり、靈魂にして神より離れんか、是れ生命なきなり、其生命なきは靈魂が離れて肉体の生命なきに同じ。之と同時に彼の肉体は朽つべく、死すべきものとなれりき、故に死は靈魂のみならず又肉体にも及べり。彼既に精神に於て死し、神に死し、罪に死したれば今や永遠の死に急ぎ、肉体も靈魂も熄ぬざる火のなかに滅ばさんとして走りつゝあり。

斯く人類の始祖たり代表者たる「一人より罪は世に入り罪より死來り而して死はすべての人に及べり」。斯く「一人の罪に由りて」すべての人は死せり、神に死せり、

罪に死せり、即ちこの朽ちはつべき肉体に宿りをも間もなく四肢百骸は解体すべく、永遠に死すべき宣告を受けぬ。何となれば「一人の逆に由りて」人皆罪人とせられし如く「審判は一の罪より罪せらるる」ればなり。

夫れ我儕全人類がかかる境遇に在るに當りて神は我儕を愛して、凡て彼を信する者に亡るとなくして永生を受しめんとしてその生み玉へる獨子を世に賜へり。時來りて彼は人となり、人類の他の元となり、全人類の第二の父となり代表者とはなりにき。而して彼は實に代表者として「我儕の悲嘆を擔ひ」「凡のものと不義を彼のうへに置き玉へり」。されば「彼は我儕の咎の爲めに傷を受け、我儕の惡の爲めに血を流し」「其靈を以て罪の爲めの燔祭とし、其血を犯罪者の爲めに注ぎ」木の上に懸りて我儕の罪を自らかのが身に任給へり、實に彼が鞭痕に由りて我儕は愈され自ら獻げて性となりしに由りて我及び全人類は贖れたるなり、而して彼は此を以て「全世界の罪の爲めに完全無缺なる犠牲とはなりにけるなり」。

夫れ神の子は「衆の人に代り死を嘗へり」、しが故に神は今「世を己と和がしめ其罪を之に負はせ」給はず。かくして「一の罪より罪せらるることの凡ての人に及びし如く一の義より義とせられ生命を獲ることも凡ての人に及べり」。故に神は其愛子が我儕の爲めに爲せし所苦みし所の事に由りて今や唯一の條件（此條件とても神自ら我儕をして之を果すことを得せしめ給ふ所の者なり）を以て、永生の左券として我儕の罪に當する所の刑罰を免じ、且つ彼の恩恵に我儕を復し、我儕の死せる靈魂を再び精神的生命に還ることを保證し玉ふなり。

是故に以上述ぶる所は稱義の全教理の大根元なり。我儕が父たり又代表者たる所のはじめのアダムの罪に由りて我儕は悉く神の恩眷を失ひ、皆怒の子となり、パウロの曰へる如く「審判は一の罪より罪せられ」たり。而して又すべて我儕が代表者たる第二のアダムが罪の犠牲となりしに由りて、神は世と和ぎ、彼等に一の新しき約束を與へ玉ひ、以て明白なる條件は一たび成就しぬ、我らには復た罪せらるること

となく「唯耶蘇基督の贖に頼りて神の恩をうけ功なくして義とせらるゝなり」

第二 然れどもその謂ゆる義と稱せらるゝとは何ぞや。稱義とは何の謂ぞや。是れ子が第二に論せんと欲する所の者なり。而して既に論究せし所の者によりて視れば是れ現に義となれるものに非るは明白なり。是れ 聖とせらるゝことなり、聖とせらるゝことは實際或程度にては稱義の直接の効果なり、然れども是れ實に神の特異の賜にして全く別種のものに屬す。即ち稱義は神が其子に由りて「我儕の爲めに爲す」もの、而して聖とせらるゝことは神が其靈もて「我儕の中に行ふ」ものなり。故にたとひ稀に例外は之れありとも、稱義の文字は聖とせらるゝことを併せて廣き意味にて用ゐらる、然りと雖も一般には使徒パウロも其他の聖經記者も皆此二者を全く殊別して各使用するなり。

又稱義は訴へ、殊にサタンの訴へより我儕を免かれしむる者なりとは牽強附會の意見に非ざるは聖書の或明白なる文言より容易に證し得ず。上文にも論じたる如く

此事につきて全聖經の論ずる所、訴へる者も其訴へも更に關する處なし。さればサタンは人を「訴ふる者」と斷言するも之を否むこと能はざるなり。然れどもパウロは其羅馬書に於ても加拉太書に於ても稱義に關して論じたるものうち多少之に論及せしことはいづくにも之れ有らざるなり。

又稱義は律法の訴へより我儕を免かれしむる者なることは聖書の或る明白なる證言を以て之を證するよりも之を默許するは遙に容易の事なりとす、即ち我儕は神の律法を犯したれば地獄の刑に當する者なり而して神に義と稱せらるゝことに依り地獄の刑罰を免かるゝことの外に多少の意義ありとせんか吾人は猶ほ容易く默許し得るなり。

畢竟稱義の抱有する所は神は其義とせし所の人々に欺かれたることなきなり、神は彼等が實際に達し居らざる所に達しをれりと思へることなきなり、又神は彼等を以て彼等が今日の情態以上のものとせることなきなり。而して神は事物の實情に反

して我儕を審判すること、その我儕が今日の現状よりも高く我儕を買ひ、或は我儕の不義なる時に當つて義なりと我儕を信じ玉ふことなどは稱義の決して抱有せざる所なり。全智の神の審判は常に眞理に在つて存す。又他人がかくある故に予も無罪なりと考へ、予は義く或は聖しと判するは神の誤りなき智慧と決して兩立し得べき者に非るなり。此の如く神はキリストと我とを混ぜしむるは我とアブラハム及びダビデと混ぜしむる能はざるが如く能はざるなり。請ふ神が智識を與へし所の人をして偏し僻する所なく之を量らしめよ、必ずや斯の如き稱義の解釋は理論にも聖書にも決して合はざる者たることを知るに至るべし。

稱義につきて明白なる聖書の解釋は有免なり、罪の赦なり。是れ父なる神の工にして、其子の血によりて爲し玉ひし挽回の祭物の爲めに神は「忍びて過去の罪を寛容に爲給ひしことにつきて其義(即ち粉血)を彰し」玉へり。是れ聖パウロが其羅馬書一篇を貫通して明白自然の解釋なりとす。故に彼は殊に此章及び次章に於て自ら

之を説明せり。曰く「その不法を免され其罪を赦はるる者は福なり主の罪を負せざる人は福なり」と。其義と稱せられ、即ち罪赦されし人には神は「罪を負せざるべし」。神は此世に於ても來るべき世に於ても、彼を罰せざるべし。彼が思慮言行に於ける罪また其すべて已往の罪は赦はれ、拭ひ去られ、恰も初めより之れあらざりし如くに神の前に復た記ゆるることあらざるべし。神はその愛子の代りて受けたるが爲めに罪人が其の當に受くべき所の罰を蒙らしめざるべし。而して我儕が基督に由りて受け入れられし其血に由りて神と和さし時より神は恰も我儕が毫も罪犯さざりしかの如くに我儕を愛し祝し護り玉ふなり。

パウロは又他處に於て一層此語の意義を擴めて論ずるが如し、曰く「神の前に義とせらるるは律法をさく者に非ず義とせらるるは律法を守る者なり」。是れパウロは我儕の稱義を以て大審判の日の宣告に關係するものとせしが如し。我主も亦明に之れにつきては宣へり曰く「それ爾その曰ふ所の言によりて義とせらる」と、是れ其前



節に宣ひし語「凡て人のいふ所の虚言は審判の日に訴へざるを得じ」を證したるものなり。然れども我らは聖パウロが此語をかゝる切ならざる意味にて用ゐし他の例を見ること幾んど希なり。其著書の語調によりて視ればかゝる意義にて用ゐざりしことは明白なりとす。殊に本題とせし聖句に於ては其明示する如く「既に馳るべき途程を盡し」たる所の人々には關せずして、今やその途程に上り「彼等の前に置かれたる馳場を趨り」初めんとせる者につきていへるものなり。

第三、第三に論せんと欲する所は義と稱せらるる所の者は如何なる人なりや是なり。パウロ明に我儕に告げて「神は不義なる者を義とす」といへり、即ち種類と程度とを問はず、單に不義なる者なり、不義なる者の外は何人をも義とせざるなり。夫れ義とす者は悔改を要とせず、故に亦赦罪の必要なきなり。赦罪を要とする者は唯罪人のみ、罪あればこそ赦す赦さるといふなれ。故に赦罪は單に罪にのみ關する者にして、其他には何物にも關する所なし。罪を赦るし玉ふ神は矜恤深しといふは

我儕が不義なるが爲め、かれは「再びこゝろに記めず」といふは我らが不法なるによりての語のみ。

然れども予がかく論する所を、凡そ人は能く義と稱せらるる前に聖と成されざる可らず、即ち潔くせられざる可らずと劇切に論する所の人々、殊に一般の淨聖或は從順は稱義に先んせざる可らずと斷言する人々（但し彼等の稱義とは末日の稱義をいふ者なり、此は全く問題外に屬す）は未だ考究せざりしが如し。論者の説は全く誤れり、其假定説は唯明に不能的の事たるのみならず、何となれば神を愛することなければ謂ゆる淨聖なるものなく、又神が我儕を愛し玉ふとの感覺なくんば神を愛することも出でざるなり、又論者自身の説は根柢より無稽誕妄にして矛盾するものなり。何となれば罪赦さるべきものは聖徒にあらざる罪人にして又罪人の名の下にあるもののみなり。神は義とす者を義とせず、唯義からざる者を義とす、既に潔くなれる者を義とせず、唯未だ潔からざる者を義とするなり。如何なる條件にて神は

義とするやこは速に論究すべし、然れどもそは如何にもあれ決して淨聖にはあらざるなり。論者の説の如く淨聖なる者を義とすといふは是れ即ち神の羔は其管て一たび取去りし彼等の罪をまた取去るといふことなり。

抑も善牧者は既に探しあてし者をのみ求め且つ救はんとするや。否、彼は迷ひ失ひし者を求め救ふなり。かれはかれの赦罪の矜恤を必要とする所の者を救すなり。

彼は各種類各程度の罪人を救ひ、今までは全く不義にして、神を愛することなく、隨て一の善なく、眞の基督敎者の品質なく、唯衷に存する所は邪惡褻瀆驕傲忿怒利慾凡そ神に逆らふ肉心の生産物のみなりし所の人々を救ひて其有罪より免れ（同時に罪の機能よりも免れ）しむるなり。

凡そ病める者、罪の重荷に任へ難く苦める者これ醫者を要するものなり、凡そ有罪にして神の震怒の下に呻吟せる者これ赦罪を要する者なり。凡そ思想言行みな其不義なることにつきて管に神よりのみならず、又百千の見證者の如くにおのが良心

により、既に罰せられたる者は耶蘇の贖罪に由りて「不義なる者を義とする」神に絶

叫す、——是れ不義の者なり、「工なき者」なり、彼等が義と稱せらるる前は一の善事も、一の眞に正しきこと深きことの工なく、唯絶えず惡事を爲せし者なり。何とな

れば彼等の心情は神の愛溢るる程に灌がるるまでは必然的實体的に惡なればなり。夫れ樹の病める間は其果も亦然り、「蓋惡樹は善果を結ばざればなり」。

人もし異論を挟みて「否、人は義と稱せらるる以前と雖も飢ゑたる者に食はせ、裸なる者に衣す、此等は善工なり」といふ者あらば予が答辯は甚だ容易なり。彼は

義と稱せられざる以前と雖も實に能く此等の事を爲し得べし。而して此等は或意味にては「善工」なり、「人々に對して善かつ益ある者」なり。然れども之を切言す

れば未だ以て此等の工の性質として善く、或は神の前に善しとはいふこと能はざるなり。すべて誠の善工は（我敎會の用語を以てすれば）稱義の後に來る者なり。故

に其善工は眞實にして活ける信仰より生ずるを以て善にして又基督に在て神に受

け納れらるゝなり。此理より推して論ずれば基督敎者の意味にて凡そ稱義前の工は  
 耶蘇基督に於ける信仰より生ぜざるが故に善ならずといふを得べし（たとひ數次神  
 に於ける或種の信仰より生ずることあれど）、否寧ろ此等の工は神がかくの如くに爲  
 られかし、爲すべしと思ひ命じ玉ひし如くにあらざりし故に（かく曰はゞ或人は甚  
 だ不思議に思ふならん）此等の工は皆罪の性質を帯べざるものなるは我儕の疑はざる  
 處なり。

おもふに此理を疑ふ所の人々は此に定めたる重大なる理論、即ち何故に稱義前の  
 工は眞に正しく善たる能はざるやを十分に考へざるに由る。其理を列擧すれば左  
 の如く極めて明白なり。  
 神がかく爲られかし、爲すべしと思ひ命じ玉ひし如くに爲られざりし工は善なる  
 ものに非ず、

且又稱義前に爲したる工は神がかく爲られかし、爲すべしと思ひ命じ玉ひし如く

に爲されざりし者なり、

故に稱義前の工は善なるものに非ず。

右第一の論は右のつから明白なり。第二の稱義前に爲したる工は神がかく爲られ  
 かし、爲すべしと思ひ命じ玉ひし如くに爲られざる者とは、若し我儕にして唯神は  
 凡て我儕の工は愛を以て爲すべし、其結果人類を愛するに至る所の神を愛するの愛  
 を以て爲すべしと思ひ命じ玉ひし事を考へなば第一と同しく明白にして拒むべから  
 ざる理由たるを知るを得べし。然れども我儕が工は一として父の（我儕の父として  
 神の）愛われらの衷に存せざる間は此愛を以て爲すこと能はず。此愛は我らが「ア  
 ハ父と呼ぶ子たる者の靈」を受くるまではわれらの心に生ずること能はざるなり。  
 故に若し神は不義なる者を義とせず、工なき者（此意味を以て）を義と稱することな  
 くば則ち基督の死は徒然なり、彼れの死にも關せず、何人も義と稱せらるゝこと能  
 はざるなり天下豈に此理あらんや。

第四。然らば則ち神は如何にして全く不義にして此時まで工ならず者を義と稱し玉ふや。唯一の條件則ち信仰に由るのみ、即ち不義なる者を義とする神を信するなり。而して「信する者はさばかれず」、加之其人は「死より生に遷れり」。耶蘇基督を信するに由りて其義（即ち矜恤）を神は凡ての信者に賜ふて區別なし——神は其血によりて耶蘇を立て、信する者の挽回の祭物と爲給へり即ち耶蘇を信する者を義とし尙みづから義たらんが爲めなり。「我思ふに人の義とせらるゝは信仰に由りて律法の行に由らず」、即ち彼が嘗て服事し、而して今に至るまで全うする能はざりし所の道徳法に由らざるなり。蓋しこの謂ゆる律法なる者は唯道徳法をさしていへるものなることは前句の後節「さらば我儕信仰をもて律法を廢るや然らず返て律法を堅固するなり」といへるを以て明なり。而して我儕は信仰に由りて如何なる律法を堅固するや。禮典の法にもあらず、摩西の儀式の法にもあらず、唯愛の法、神を愛し隣を愛する聖なる愛の廣大不變の法なり。

抑も信仰なる者は之を概言すれば「見ゆる者」即ち過去未來又精神的にして、人間昧感に由りては識るべからざる者の神秘的超自然的修證識認なりとす。稱義的信仰の抱有する所は唯「神基督に在りて世を己と和がしめ」給ひしことの神秘的超自然的修證識認のみに非ずして、又基督は我一人の罪の爲めに死に給ひしこと、我一人を愛し玉ふこと、我一人の爲めに其身を棄て玉ひしことを深く信じて之に信賴することとなり。而して罪人のかく信する時には其如何なる時を問はず、幼童の時にも丁壯の時にも、若くは頭髮雪の如くなる時にも神は其不義なる者を義と稱し玉ふなり。即ち神は其子の爲めに從來一の善なき者を救し宥め玉ふなり。神は嚮に悔改を彼に與へ玉ひぬ、然れども其悔改とは彼が善なる者は一も其衷になく、唯存する者は衆惡のみとの深き感念に外ならず。而して彼が始めて基督に由りて神を信じたる時より身に有し、又行ひたる善は信仰の發見したるものに非ずして、生出したる者なり。是れ信仰の果なり。夫れ樹にして善なれば、其果亦隨て善ならざるを得ず。

予は此信仰の性質を我教會の用ふる説明よりも更によく之を述ぶること能はず、いはく「救拯の唯一の器は（稱義は其一分枝なり）信仰なり、詳言すれば神は既に我儕の罪を赦し、又赦したまふこと、及び神は耶蘇基督の死と苦難の徳とに由りて再び我儕を眷顧し給ふことに深く信頼することなり。——然れども我儕の注意せざる可らざることは冷熱高低の信仰に由りて神に對する心情の時に停歇躊躇することある可らざることなり。水上を歩みて基督に近づき來りしペテロは其信仰の弛ぶと共に溺没の危難に瀕せり。されば我儕も若し信仰の動搖し躊躇することあらばペテロの如く、水中にはあらで却て地獄の底なき坑のうちに沈むべし、恐れざるべけんや」。

（基督の苦難につきての説教第二）

「故に確固にして間斷なき信仰は唯基督の死は全世界に關する者たるを信するのみならずして、彼は脚みづからの爲めに至き犠牲となり、脚の罪を残りなく潔め玉ひしことを信じ、使徒と共に基督は脚を愛し、脚の爲めにそのれを棄てりといひ得

るとなり。何となれば是れ基督をして脚のものたらしめ、彼が贖罪の功徳を脚みづからに適用せしめん爲めなり」。（聖餐禮につきての説教第一）

此信仰の稱義の條件たることを堅うせんが爲めに予は第一に信仰なくんば稱義なしと曰はん。何となれば「信せざる者は既に審判れたり」、而して其信せざる限りは其審判は之を免るること能はず、且つ神の怒その上に留るべければなり。

ナザレの耶蘇の名よりは「天下の人の中に他の名を賜はざる」如く、又審判れたる罪人が嘗て其有罪より救はれ得べき他の功徳なき如くに、耶蘇の名を信するの信仰に由るよりは耶蘇の功徳に與るを得べき他の道あらざるなり。故に我儕が此信仰なき間は「夫の約束につきて結び玉ひし契約に與りなき者」なり、又「イスラエルの藉に非ざる異邦人世に在りて神なき者」なり。如何なる懲徳（世に謂ゆる）を人の有し得るども——予は福音に「外にある者を鞫ことは何ぞ我に與らん」とある其の人につきていへるなり、——又如何なる善行（世にかく稱せらるる）を彼が爲し得るとも毫も

益する所なし、彼は猶怒の子なり、基督を信するまでは猶呪詛の下に在る者なり。故に信仰は稱義の必要なる條件なり。然り其唯一必要の條件なり。而して第二に注意して觀察すべき要點は神が「工なき」所の「不義なる者」に信仰を與へ（信仰は神の賜なればなり）玉ふ其時その「信仰を義とせらるる」ことなりとす。彼は此よりさきに一の義なる者を有せず、消極的義なく、無罪ならざりき。然れども彼が信せし其時に「其信仰義とせられたり」。

然れども「神基督を我儕の代に罪人とせし」如く、詳言すれば、罪人として基督を遇し、我儕の罪の代に彼を罰せし如く、神は我儕を彼を信せし時より義と爲し、即ち神は我儕を罪の爲めに罰せず、恰も無罪にして正義なるものなるが如くに我儕を遇し給へり。

然り而して世人の此信仰の稱義の唯一條件たることに同意し難きは之を理解せざるより生ぜずんばならず、故に予は重ねて言はん、是れ唯一の條件なり之れなくば

何人も義と稱せられず、罪を赦さるる爲めには直接に絶對に必要な唯一のものなりと。一方に於ては人は信仰なくして、他に種々の善を有すとも彼は決して義と稱せらるる能はざると共に、他方に於てはたとひすべての善を缺くと假定するも猶此信仰にあらば、彼は必ずや義と稱せられずんばならず。たとへば茲に或る種類或る程度の罪人ありて、深く其甚しき不義なること、善事を思ひ、言ひ、行ふに全く不能にして、必ず地獄の火に投せらるべきことを自覺せりと假定せよ、又此無力にして希望なき罪人が全くに身を投じて、基督に於ける神の矜恤に信頼せり（是れ神の思によらざれば爲し能はざるもの也）と假定せよ、誰か彼は此時に赦されたることを疑ふものあらんや。誰か此罪人が義と稱せられ得る前に猶此信仰の外に又必ず要求せらるべきものありと斷言せんや。

されば若し世の初めより嘗て一のかゝる例證ありしならば（かゝる例證は方を万倍して既に有り、今も有るに非ずや）、是れ明に上來論する如く信仰は稱義の唯一單

獨の條件なるなり。

可憐にして罪惡に充てる罪深き蟲けらにして彼等が享くる矜恤受くべきものにあらずして其の恩惠（彼等が舌の渴を止むる一滴の水より永遠に於ける榮光の廣大無邊の富に至るまで）に關し神の御行爲の理由を問ふべきにあらず。

夫れ其行ふ所を何人にも明示し給はざる神に向ひて、何故に爾は信仰を以て稱義の唯一條件と爲し給ひしやと問ひ、又は何故に爾は信する所の者のみ獨り救ふべしと宣り給ひしやと質すは我儕に取りては爲すべからざることなりとす。是れ聖パウロが此羅馬書第九章に於て最も力めて主張する所の者なり。即ち救罪及び受納の條件は我儕に存せずして、唯我儕を召す所の神に存す、神に義しからざることなし、其條件を定むるは我儕に關せずして唯神みづからの喜び爲し給ふに在り、神は正に「我れ矜恤んと欲ふ者を」即ち耶蘇を信する所の者を「矜恤ん」と言ひ給ふを得べし。「されば」由て以て受納せらるべき條件を選定するは「願ふ者にも趨る者にも由らず

唯めぐむ所の神に由れり」即ち神みづからの自由濶大の愛、功なきに眷み給ふ善に由る外は如何なる事ありとも人を受納し給はざるなり。「然れば憐憫んと欲ふ者を憐憫み」即ち其愛の子耶蘇を信する所の者をあはれみ、「剛愎にせんと欲ふ者を」即ち信せざる所の者を「剛愎にせり」即ち死に至るまで其心情を剛愎に爲し置き給へり。

然れども神の定め玉へる稱義の條件「若し爾曹主耶蘇基督を信せば救はるべし」を知り得べき一の理由は驕慢を避くるに在り。驕慢は既に天の使を滅し、「天の星三分の一を」地に墮せり。又惑者の「神の如くなるべし」といひ、アダムの之に由りて其安固の地位より墮ち、罪と死とを此世に生せしめしも亦主として此驕慢に由らずんばあらず。是故に神と其子等との和解の條件を定むるに子等が全く謙卑し、塵垢に均しき者とせしむるは神にふさはしき智慧の一例たり。信仰は此の如きものなり。されば此信仰を以て神に來る者は深く自らの邪惡と其有罪無力に心を溜め、その假想

の善を又は如何なる徳と義とを毫も願ざる故に信仰は謙卑を生ずる必要なるものなり。彼は唯徹頭徹尾の罪人として、内外身心共に罪に満ち、自らくだけ自ら辱し、唯不義の外は有てる者なく、自己の罪と不幸との外は何事をも訴ふるべきなくして神の前に出で來らざる可らず。唯其れ此の如し、故に彼の口つぐみ、全く神の前に有罪として立ち、而して始めて耶蘇を視るに彼罪の爲めに全くして唯一なる挽回の祭物を以てするに至る。獨り此の如くにして彼は「基督を獲」かつ「信仰に基きて神より出づる義」を受くるなり。

吁此等の語を聞き或は讀める卿不義なる者よ、卿惡く、力なく、不幸なる罪人よ、予萬物の審判者なる神の前にて卿に命ず、凡て卿が不義のまゝにて直ちに神の許に往け。心して多少共に卿が義をあげつらひて以て卿が靈魂を滅すに至る勿れ。全然不義有罪失はれ滅され、地獄の刑に當せる者として往け、さらば卿は神の眷愛を識り、神の不義なる者を義とし給ふ者なることを知るに至るべし。工なく力なく口つ

ぐまれし罪人の如く卿は瀧々所の血に携へゆかるべし。卿目を舉げて基督を見よ。茲に卿の罪を取去る神の羔あり。卿卿の工と義とを論せざれ。謙卑も後悔も誠實も言はざれ。決して之を言ふ可からず。是れ卿を血もて買ひし所の主を否拒するなり。唯卿の驕傲剛愎にして罪に満てる靈魂の爲めに排はれし贖罪金なる契約の血を哀訴せよ。今や身心内外の不義を見且つ感ずる所の卿は誰ぞや。嗚呼卿は其人なり。予は予が主の爲めに卿を求む。予は信仰に由りて神の子たることを卿に求む。予は主のために卿を要めり。當に地獄に墮罪すべきを感ずる所の卿は當に神の榮、不義にして工なき者を義とし給ふ神の自由闊大の恩恵の榮を進ましむべき者なり。噫嘻速に來れ。主耶蘇を信せよ、さらば卿は、卿の如き者と雖も神と和ぐことを得べし。



信仰の義

摩西律法に由れる義を指しては之を行ふ者これに由て生を得べしと録したり。  
然れど信仰に由れる義は如此いへり爾心に基督を誘ひ下らん爲めに誰か天  
に昇らんと言ふこと勿れ。又基督を死にし者の中より誘ひ還らん爲めに誰か陰  
府に降らんと言ふこと勿れ。然らば何と言へるぞ道は爾に近く爾の口にあり爾  
の心に在りと是れ則ち我儕が宣る所の信仰の道なり。 羅馬書十〇五―八

(二) 使徒パウロは此言を以て摩西の與へし契約を主基督の與へし契約に對抗せ  
しめんとしたるには非ず。若し我儕にして嘗てかく思ひしことあらば此は我儕が精  
察の足らざりしなり、蓋し此言の首尾共に摩西自ら當時の契約につきてイスラエル  
の人民に語りしことは「申命記三十〇十一、十二、十四」に照らして明白なり。然り  
と雖も神が基督に由りて各時代(神が肉体を取りて顯現し玉ひし後と猶太時代と又

其以前をも抱有するなり)の人民の爲めに立て玉ひし契約は恩惠の契約にして、之を以て聖パウロは樂園に於てアダムに結び玉ひし事工の契約——たゞ一般に、殊にはパウロが今論じつゝある猶太人によりて、神が人と結び玉ひし唯一の契約なりと想像せし所の契約に對抗せるなり。

(二) パウロは此等の猶太人の事につきて最も懇に此章の初めにいへり「我心に願ふ所と神に祈る所はイスラエルの救はれんことなり彼等が神に熱心なることは我證すされども其熱心は知識に由るに非ず彼等は神の義を知らず(神の愛の子に由り、耶穌に在る代贖に由り、唯神の恩恵と矜恤とに由りて我が罪を赦るし玉ふことより生ずる所の義と稱せらるゝことを知らず、)己の義を立てんことを求めて(彼等が赦罪受容の基督たる「不義なる者を義とする神」を信するの信仰に先んじて彼等自己の淨聖を求めて)神の義に服はざるなり」。而して其結果は彼等言行の過失の爲めに死を求むるなり。

(三) 彼等は「凡て信する者の義とせられん爲めに基督は律法の終となれり」しこと、——基督が一たび自己を祭物として最初の律法即ち契約、(是れ實に神が摩西に與へず、却てアダムの無罪無垢なりし時之に與へ玉ひしもの)及び「かく爲して生命を得よ」どの容赦なき嚴命を撤回し、同時に之に代ふるに「信じて生さよ」どの好契約を以てせしこと、信せよさらば爾救はるべし、今や爾は罪の有罪と權能より、併せて其罰より救はれたりとのことを知らざりき。

(四) 嗚呼今日と雖もキリスチアンと稱せらるゝ輩のうち之を知らざる者何ぞ多きや。神に熱心にはありながら、而かも知識に由るに非ず、往時の猶太人の如く「己の義を立てんことを求め」、之を以て其赦罪受容の基礎と爲し、從て「神の義に服ふ」を甚しく拒絶する者の何ぞ多きや。兄弟よ、われも亦パウロと共に心に願ふ所と神に祈る所とは卿等の救れんことなり。而して卿等の途に當れる此大なる蹶きの石を遠け除かんが爲めに、予は先づ第一に如何なるものか是れ律法に由れる義に

して、如何なる者か是れ信仰に由れる義なるかを論じ、第二に律法の義に頼ること  
の愚にして、信仰に由れる義に服ふの智の所爲なることを論ずべし。

第一。夫れ律法の義は曰く凡そ律法を行ふ者は之に由りて生く可し」と。蓋し間斷  
なく又間然する所なく律法に従事して始めて限りなく生くべしといへるなり、神が  
樂園に於て人に與へ玉ひし此律法即ち契約（普通には事工の契約と稱す）は其各條項  
に全く従順なるを要す、嘗てアダムが始めて創造せられし時の淨聖と幸福とを永遠  
にまで享有すべし條件として嚴格に之を遵奉して、一事も懈怠背反せざる可きこと  
を要求す。

又此律法の義の要求する所は凡そ人は其内心外身を合せ、積極消極を兼て諸  
の義を完うすべきこと、彼は皆に各 虚言と各 惡行とを云又爲さざるのみなら  
ず、神の旨に順從して各情 感各願望各思想を制止すべきこと、彼は彼を造りし神  
の淨聖なるが如く、其心情も其云爲ことも凡て皆繼續して淨聖なるべきこと、彼は

神の潔さが如く其心も潔く、天の父の完全が如く完全かるべきこと、彼は彼の心  
を盡し、精神を盡し、意を盡し、及び力を盡して主なる神を愛すべきこと、彼は神  
の造り玉ひし人々を神が此等を愛し玉ふが如く悉く愛すべきこと、此普通の仁慈  
によりて彼は神（愛なる所の）に居り、神亦彼に居り玉ふべきこと、彼は力を盡して  
主なる彼が神に事へ、何事を爲すにも神に榮を歸するを目的とすべきこと是なり。

以上は律法の義に由りて要求し、而して之を實行し得し者の此に由りて生くべき  
所の者なり。然れども猶一步を進めて律法の義は要求するに此神への全き従順、此内  
外の淨聖、此心情言行の神旨と一致等は其程度に於て完全たるべきことを以てす。  
身心内外の律法の一點一畫も之を缺くるに於ては、一の減宥も寛假も絶對に與へら  
れざるなり。若し外部的事項に關する凡ての誠命を遵奉すと雖も、猶全心全力を傾  
け盡し、最も完全に之を遵奉せしに非ざれば可なりとはせざるなり。又若し心と意  
と力とのあらん限を盡し、精神の熱誠を傾け瀉ぎて神を愛せしに非ざれば、此契約

の要求に合ひて各能力を盡して神を愛したりとはいはざるなり。  
 猶一事の必ず律法の義が要求せざる可らざる所の者あり、即ち此普通の従順、此完全なる身心の淨聖は、神が始めて人を造り生命の息を其鼻に入れしより、其試練の日終り、永生を堅く握り得るまでは、敢て一瞬の間断なく、一毫の懈怠ある可らざることは是なり。

されば律法に由れる義はかくの如くいふなり、「嗚呼なんぢ神の人よ、堅く愛に立ち、爾が由て造られし神の像を失ふことある勿れ。爾もし生命を失はず永く享けんと欲せば、今なんぢの心に誓ふされたる誠命を守れ。おのれを愛する如く、神の造り玉ひし諸の人を愛せよ。神の外何物をも慕ふ勿れ。之を思ひ之を言ひ之を行ふ唯神をのみ目的とせよ。身体の一動靈魂の一轉決して爾が標的たる神及び其貴き召呼の褒美を離れて迷出る勿れ。凡て爾に存する所の者をして神の聖名を讃め稱へよ、爾の靈魂の各能力を其各種類各程度に於て、また爾が此世に在らんかぎり時々刻々に

神をほめよ。「かく爲して生くべし」、爾の光は輝かん、爾の愛は爾が天なる神の家に受容れられ、彼と偕に限りなく王たるまでは愈よ益す盛なるべし」と。

「されば信仰に由れる義はかくいへり爾心に基督を誘ひ下らん爲に（恰も卿が神に受容せらるゝことの爲めに神が預め之を成し遂げよと卿に要め玉ひ、而して爲し得べからざる業なりしが如く）誰か天に昇らんと言ふこと勿れ又基督を死にし者のうちより誘ひ還らん爲めに（恰も卿が神に受容せられんには猶もかく爲さざる可らざる如く）誰か陰府に降らんと言ふこと勿れ然らば何と言へるぞ」卿が今永生の嗣業として受容れられ得べしとの主義に従ひて「道は爾に近く爾の口に在り爾の心に在り是すなはち我儕が宣る所の信仰の道なり」、すなはち神が今や基督耶穌に由りて罪人と結び玉ひし所の新契約なり。

「信仰に由れる義」は即ち神が其獨子の功德と仲保に由り墮罪の人に與へ玉ひし所の稱義の地位（及び其結果として若し我儕が身を終るまで之を失墜することなくば

現在及び終極の救拯)なり。此一部分はアダム墮罪後直ちに神より示啓せられ、「蛇の頭を碎く」所の婦苗裔に關して、アダムと其苗裔とに結び玉ひし最初の約束中に存するなり。その神の使が天よりアブラハムを呼びて「エホバ論したまふ我已を指して誓ふ汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし」といひしは一層明白に垂示し玉ひしなり。而してモーゼ、ダビデ及び爾後の預言者には猶一層明白に示啓し玉ひ、此等の人々に由りて其各年代に於ける神の人民にあらはし示し玉へり。然れども此最大部分は此等の諸聖と雖も之を知らず、之を理會り得しもの幾んど之れなし。「生命を壞たざる事」とは「福音に由りて今われらに顯はるる如く當時の猶太人には「明著」ならざりしなり。

夫れ此契約は罪人に向ひて「毫も無罪不妄の従順を完うして生きよ」とは曰はざるなり。若しかく言ふならば罪人は基督が彼の爲めに爲ししこと苦しみし事の恩澤に於ける極めて鮮少にして、彼は生命を得んが爲めに「基督を誘ひ下らん爲めに天に

昇り」、或は「基督を死にし者のうちより誘ひ還らん爲めに陰府(見るべからざる世)に降」れと要求せらるるも己むを得ざるなり。此契約や爲し能はざる所の事は一も要求する所なし、(たとひ俗人には爲し能はざる事なりとも、神の靈に由りて助けらるる人には爲し難きものあらず)前者の如きは唯人間の弱さを愚弄する者たるのみ。切に之を論すれば恩惠の契約は我儕が義と稱せられんが爲めに絶對的不可避的必要的ものとしては何事をも爲せどは我儕に要求せずして、唯神すなはち其子と子の献げたる挽回の祭物との爲めに「工なき不義なる者を義とする」所の神を信じ、其の信仰を義とせられたり。さればアブラハムも「神を信じエホバこれを彼の義となし玉へり」。「かつアブラハムが割禮の號を受けしは未だ割禮を受けざる信仰に由りて義とせられたる印證なり此は割禮を受けざる凡ての信者の父にして彼等の義とせられん爲なり」。「夫れ信仰に由り義とせられたりと録されしは特に彼の爲めのみならず亦われらの爲に録るされし世」信仰に由りて義とせられたる者は必ずその神に受け

容れられんが爲めに十全の從順を守らざる可らず、「我儕もし我主耶穌を死より甦  
らせし神を信せば同じく義とせらるゝことを得べし耶穌は我儕が罪の爲めに解され  
又われらが義とせられんが爲めに甦らされたり」即ち我儕が罪の赦と、彼を信す  
る所の者の受くべき第二の生命との保證の爲めに甦られたり。

然らば則ち赦罪の契約、愛と恩恵の契約とは何と言へるぞ。曰く「主耶穌基督を信  
せよ然らば救はるべし」と。卿が之を信するの日即ち卿は甦に生く可し。卿は復び神  
の眷愛を受け、神のよろこびに入る、即ち生命の存する所以なり。卿は呪詛より救  
はれ、神の怒より拯はるべし。卿は罪の死より甦りて、義の生命に入るべし。而  
して若し此状態にて、基督を信じつゝ終りまで繼かば卿は決して第二の死を味ふこ  
となく、且つ卿の主と共に苦みたれば、亦彼と共に限りなく生きて王たるべし。

夫れ「此道は近し」。此ののちの地位は明白容易にして、常に近きに在り。聖靈の  
作用によりて「爾の口に在り爾の心に在り」。卿が心に神の「死より甦らせし」所の  
耶穌を信じ、口を以て彼を卿が主なり、卿が神なりと公言する即時卿は鞠より救は  
れ、今日までの有罪と其刑罰とより拯はれ、餘生を眞の淨聖もて神に事へ得べき權  
能を有するに至るべし。

さらば「律法に由れる義」と「信仰に由れる義」との差違果して如何ぞや。最初の契  
約即ち事工の契約と、第二即ち恩恵の契約とは其相距る如何ぞや。其本然不變の差  
違は、蓋し一は此契約を爲す人を以て神の像に肖せて造られ、其眷愛の下に在りて、  
聖く福に、而して其地位は愛と喜と生命と不朽とを以て永續すべき者となし、一  
は今や聖からず福ならず、神の光榮ある像を失ひ、神の怒常に彼の上に留り、其云  
爲する所は唯罪にして、其靈魂は既に死し、永遠の死に向ひてひた走りに走りつゝ  
ある者と想像す。而して後者の境遇に在る人に關して信仰の契約は、彼が再び其失  
ひし眞珠を得べく、神の眷愛と像とに還り得べく、其靈魂に神の生命を復し、永生  
の源なる神を識り神を愛するにふたゝび至り得べしといふ條件を付す。

また、**事工の契約は人が神の眷愛と、神を識り神を愛すると、及び淨聖と幸福とに在りて繼續する爲めに、完全なる人として、凡ての神の律法に完全不變の從順を要求す。而して恩惠の契約は人が神の眷愛と生命とを回復せんが爲めに、唯信仰を要求す、神に由りて不順悖戾の者を義とする所の基督を信する活ける信仰を要求す。**

猶また、**事工の契約はアダムと其裔とに神より未來の祝福を受けんが爲めに其代價を拂ふべきことを要求す。然れども恩惠の契約に於ては我儕が一物の拂ふべきものなきを以て神は全く我儕を赦し玉へり、但し我儕は我儕の爲めに價を拂ひ、自ら棄てて「我儕の罪の挽回の祭物となり、第に我らの爲のみならず徧く世の爲の挽回の祭物となり」し所の基督を信するのみ。**

此の如く**初めの契約は今日人の子等が到底達し能はざる極遠のもの、即ち罪に孕れて生れたる者より遙に隔れる所の無罪不妄の從順を要求す。而して第二の契約は**

甚だ**近き所の者を要求し、爾は罪なり、神は愛なりといへり。實に卿は罪の爲めに神の光榮より遠かれり、然れども猶神には恩惠あり。されば卿が凡ての罪を赦し玉ふ所の神に携へ往け、此等の罪は雲の如くに散じ去るべし。若し卿にして不義なるなかりせば不義なる者として卿を義とする所の基督の必要なかるべし。然れども天下に義人なし、されば十分の信仰を以て近く來れ。神の宣ふ如く、事は成るなり。恐るゝ勿れ、唯信せよ、義の神は凡そ耶穌を信する所の者を皆義とし玉へばなり。**

第二 **以上論ずる所の如くなるが故に予が次に論せんと欲する「律法に由れる義」に頼ることの愚にして、「信仰に由れる義」に服ふの智の所爲なることは容易に理會り得らるべし。**

「かく爲して生さよ」どの**「律法に由れる義」に今も猶依り頼める者の愚は下條を見て分明ならん、彼等は善く之を思はざるなり、彼等の第一着歩は第一に誤れり。何となれば彼等は此契約に由りて能く或る祝福を要め得べしと思ふに先ちて、まづ此**

契約が初めに結ばれし所の人と同じ境遇に彼等は在りと想像せざる可らず。然れども此想像の愚なるは甚だ明かならずや。何となれば此契約は罪てふものを知らざるアダムと結ばれしものなればなり。故に此の如き基礎の上に立てる建物は其薄弱なること最も明かならずや。かく砂上に家を建つる所の人の愚は笑ふに堪へざる所ならずや。蓋し彼等は此契約は人が「愆と罪とに死にし」時に結ばれしには非ずして、彼が神の前に在つて靈も肉も共に活ける時、罪といふものを知らず、神の聖さが如く聖かりし時に成りし者たることを毫も思はざりしが如し。又彼等は此契約は決して一たび失ひし神の眷愛と生命とを回復せん爲めに設けられしには非ずして、其の永遠の生命に於て完うせらるるまで、其繼續と増加との爲めをのみ目的として結ばれし者なることを忘れたるが如し。

又彼等は此の如く「律法に由れる彼等の義を立てんと求むる」所の者は律法が絶對的に要求する所の從順即ち義を如何に行はんかといふことを思はざるなり。蓋し

是れ律法の各個條に對して完全無缺ならざる可らず、否れば律法の請求にかなはざるなり。然れども卿等のうち誰かかゝる從順を完うし得るや。又之に由て世に處し得るや。卿等のうち誰か神の外部の誠命を其一點一畫も缺損なく完うし得べきや。大事にまれ小事にまれ神の禁し玉ふ所の事は一も之を爲さるるか。神の命じ玉ふ所の事は悉く皆之を爲し盡すか。一の虚言をいふことなきか。卿等の語談は常に「聽者をして益あらしめ」たりしや。而して「食ふにも飲むにも何事を爲すにも凡て神の榮を顯はすやうに行」へりや。外部の誠命に既に然り、況んや神の内部に關する誠命を悉く完うするに於てをや。此内部的誠命や。卿等の靈魂の各氣稟、移動の悉く神に對して淨聖なるべきを要求するなり。卿等果して「心を盡して神を愛し」得るや。おのれの如くすべての人類を愛し得るや。「斷ぜず祈り」得るや。「凡ての事感謝し」得るや。神をして常に卿等の前に在らしめ得るや。而して各情感願望思想をして神の律法に遵ひ制せしめ得るや。



卿寺猶一步を進めて思ふべし。律法の義の要求する所は皆に神の各誠命を積消兩  
 極、及び内外共に遵守するのみに止らずして、亦之を完全なる程度に於て守るに在  
 り。如何なる際に在りても律法の聲は「爾なんぢの力を盡して爾の神エホハに事ふ  
 べし」是なり。これには一の寛假なく、懈怠を赦さず、從順の全度を聊かにても缺  
 き盡さざるれば則ち之を鞠き、而して直ちに其背反者に呪詛を宣告す。是れ唯正  
 義の不變不易の繩墨を執て、唯正義あるのみ、矜恤を知らずといふなり。  
 然らば則ち誰か能く爬羅剔抉寸毫も不正の事を見遣がさるかゝる審判者の前に  
 立ち得べきや。「義とせらるる者一人だにゐることなき」——アダムの子孫中には一  
 人もなき彼の常開裁判所に於て鞠問せらるる彼等の弱味は果して如何ぞや。何とな  
 れば假りに我儕は今諸の誠命を力を盡して遵奉すとせん、然れども一の些少の壞  
 けあればすべて我儕が生命の請求を破壊し去るを以てなり。若し我儕にして誠命の  
 一條一項を犯すならば此義は則ち無効となる。蓋し律法は少の缺損なく之を完ふし、

并に時に於ても程度に於ても完全なる從順を成し遂げざりし者を鞠げばなり。故に  
 敢て其大小を問はず一たび罪を犯したる者には「たゞ恐れて審判を待つこと神に仇  
 敵を焚滅さんとする烈火のみ遺るなり」。

されば墮落せる人が此義を以て生命を求めんとするは豈に愚の極に非ずや。夫れ  
 人は「邪曲のなかに生れ罪に在りて彼が母彼をばうみたる」に非ずや。又人は其天性  
 は凡て「地に屬るもの情慾に屬るもの悪魔に屬るもの」悉く「腐れて悪むべきもの」、  
 神の恩恵を蒙る迄は「一の善事なく」、加之彼みづからは一の善きことを思考す  
 るだに爲し能はざる者にして、渾て身これ罪にして唯不義の一塊物、其氣息は罪を  
 のみ呼吸し、言行に於ける實際的罪愆は其頭髮の多きよりも多きものに非ずや。か  
 くの如き不潔有罪無力の蟲豸の分際を以て、「おのれの義」に由りて神に容れられん  
 ことを求め、律法に由れる義を以て世に處せんと想ふものは、何ぞその頑鈍椎魯の  
 一に此に至れるや。

抑も「律法に由れる義」に依頼の思を證するは適に以て「信仰により神に由れる義」に服ふの智の所爲たることを證するなり。是れ以上に陳べたりし所に就きて考ふれば實に明白なることなり、夫れこの律法に由れる義を棄てて其第一着歩を誤らず、自己の義を無き者として顧みざるは實に眞理すなはち物の真相に循ふ所の所爲と爲す。抑も我儕が現實の情態は我儕自ら能く心と口とを以て知れるに非ずや。我儕は我儕自身と共に此世界に腐敗邪惡の性質、實に意外にして之をいふに言葉なきまで腐敗したる性質を齎らし送る者なるを知れるに非ずや。我儕は凡そ惡しき者には傾き、凡そ善き者を好まず、心に滿るものは驕傲私意、制し得ざる情慾愚なる願望、凶濫なる情感にして、神を愛する者たるよりは世を愛する者、快樂を愛する者なるに非ずや。我儕が心情既に然り、言行の善ならざるは固より其所にして、唯不義不淨の云爲のみ、故に我儕言行の實際的罪惡は天の星の如く衆人の前に顯露せるならずや。されば惡を見るに得堪へ玉はぬ神には喜ばれず、其義憤忿怒、及び罪

の價なる死を受くるの外何物も此神より受くるに足らざる者ならずや。我儕は如何ならん我儕の義(謂ゆる義なる者本来われらに無し)を以てするも、又如何ならん我儕事工(惡樹に結びし惡果の如き)を以てするも、決して神の怒をなだめ、若くはわれらが當に受くべき刑罰を動すこと能はず、而してわれらの傾向に放任し置かばわれらは益す悪く、愈々深く罪に陥り、惡行と邪念とを以てわれらがよこしまの全量を充たし、たい破滅の來るを待つばかりに至るまで日又日益す神に背き戻れるに非ずや。以上は實に我儕が天性として今日の現状に非ずや。然らば則ち之を心に識りて之を口に表はすは、換言すれば「律法によれる義」を棄つるは事物の真相に循ふ所の所爲にして、眞の智慧の一例なりとす。

且つ「信仰に由れる義」に服ふことの智の所爲たることは、是れ則ち神の義なることを思へば明白なるべし。予惟らく此義に服ふことは神すなはち常に智慧の神たるのみならず、天地及び其造りし各動物の主宰たる神が自ら選定し建立せし所の、神

と和解の方法なりと。夫れ神に對ひて爾何を爲すやと問ふことの人間に爲し得ぬ如く、たとひ智者なりとも彼よりも大なる者萬有の主宰と論争することは爲し得ざる所なり。故に神の選び玉へる所の者にはすべて之に満足し、すべての事此の如くにして、「是れ主の爲し玉ふ所なり主をしてその善と爲し玉ふ所を爲さしめよ」といふは是れ眞の智慧なり、健全なる理會の標號なり。

又神が罪人の爲めに神と和ぐの道と與へ、我儕をして神の手より離されず、その記憶より拂ひ去らざらしめ玉ひしは全く其廣大無邊の恩惠愛眷矜恤に由ることを思へば此信仰の義に服ふの智なることは明かならん。故に如何なる方法なるにせよ神の優情の矜恤、無邊の善よりして可として之を定め、深く神に背き、かくも久しく頑固に叛ふ仇敵も猶且つ復歸を許すほどの方法ならんには、我らは滿腹の感謝を以て之を受くるは最も智なることならずや。

なほ一言此義に服ふの智の所爲たるをいはん。蓋し最も善き方法によりて最も善き目的を達するは是れ智の爲す所なり。今夫れ人の志し得る所の最も善き目的は神と偕に在るの幸福に非ずや。又墮落せる人の志し得る最も善き目的は神の眷愛に復へり、其像に再び肖ることに非ずや。而して其由て以て肉体の生命よりも遙に優れる神の眷愛に復へり、又靈魂の眞生命たる神の像に再び肖得んが爲めに神より人に與へられたる、此天が下に於て最善にして實に唯一なる方法は「信仰に由れる義」に服ふこと、すなはち神の生みたまへる獨子を信すること非ずや。

第三。是故に苟も我が罪の赦され、復び神の眷愛を蒙らんと欲する所の者は決して「われ先づ之を爲さざる可らず、われ先づ諸の罪に克ち、もろくの悪言邪行を除き、すべての人にすべての善を爲さざる可らず、又はわれ先づ教會に往き、主の晩餐に與り、益す説教を聽き、益す祈禱をつとめん」と心に思ふ勿れ。嗚呼わが兄弟よ、もしも此く思はば卿等は大に誤れり。卿等は猶神の義を識らざるなり、神と和解の基としておのが義を立てんと求めつゝあるなり。卿等は神と和ぐに至るまで

は罪の外は何をも爲すこと能はざる者たるを知らざるか。されば此く曰ふべし、「われ先づ之を爲さざる可らず而してのち信すべし」と。否れ、先づ信せよ。卿等が罪の爲の挽回の祭物たる主耶穌基督を信せよ。先づ此基礎を置く、而して後ち凡ての事を善く爲すべし。

又心に「われ一の善なきが故にわれは神に受容れらるること能はず」と思ふ勿れ。誰か能く神の手に受容れらるるに足れる善を有したるものありや。アダムの裔にして誰か嘗てかゝる善人ありしや。此のちとて、天地の終極に及ぶも能くかゝる人あるべきや。卿等とて亦然り、卿等は決して善人ならざるなり、卿等に毫も善なし。卿等が耶穌を信するまでは決して善人たらざるべし。却て卿等は自らかのれの益す悲しさを發見せん。然れども神に受容れられんが爲めに惡しくあるべきことの必要あらんや。卿等は既に惡人ならずや。然り、神は之を知り玉へり。而して卿等は自ら之を否む能はず。然らば敢て躊躇する勿れ。今や萬事の準備は整へり。起

ちて爾の罪を滌ぎ去るべし。源泉滾々溢れて盡きず。今は羔の血にて白く卿等を洗ふべきの時なり。彼は今ソナを以て卿等をあらひ玉ふべし、而して卿等は清くなるべし、即ち彼は卿等を洗ひ、而して卿等は「雪よりも白くなるべし」。

いふ勿れ「されど我は今十分に罪を悔ひ己を恨むを知らず、我は我罪につきて十分に感じをらす」と。予は之を知れり。予は卿等が益す罪を感じ、現狀よりも千倍もまさりて益す悔恨せんことを神に祈めん。然れども之が爲めに緩ふ勿れ。思ふに神は卿等をしてかくならしめ玉はん、されど卿等が信する前に於てにはあらず、信するによりてなり。恐くは卿等が罪の赦るされたること多きを知りて益す基督を愛するまでは卿等は多く泣かざるべし。此時に當つて耶穌に目を注げ。視よ如何に彼は卿等を愛するぞ。彼が卿等になせし外猶は何を爲し得んや。

あゝ神の羔は嘗てなやみを受けに、  
爾の愛の如く嘗て愛なりき。

目をどいめて彼を視、かれが卿等を見かへり、卿等の顔梗なる心情を破るに至るまで敢て旁視する勿れ。さらば卿等の首は水となり、目は涙の泉たるべし。

又「われ基督に就くまでに」にても多く何事をか爲さる可らず」といふ勿れ。予は一步を譲りて卿等の主が其來臨を猶豫すと假定して、彼が卿等に命じたる所の者を卿等が爲し得る限り爲しつゝ、彼の來現を待つ所の正當なることなりとせん。されどかゝる假定を爲すの必要なきに非ずや。卿等は如何にして主は此猶豫を爲し玉ふことを知れるや。恐くは彼は旭日の出づるに先ちて、東天を照らす曙光の如く現はれ玉はん。嗚呼彼に時を假す勿れ。時々刻々彼を待ち望め、今や彼は近し。既に戸外に在り。

抑も何の目的もて、卿等は罪の拭ひ去らるる前に一層誠實ならんとて待つにや。神の恩恵を受くるに一層價あるものたらんが爲めか。悲いかな卿等は猶おのが義を立てんとしつゝあり。夫れ神の矜恤は卿等が其價あるが爲めに非ずして、神の憐憫

の情固より然るなり、卿等が義人たるが故に非ずして、耶穌基督既に卿等の罪を贖ひしに由れるなり。

猶之をいはん、もし誠實のうちらに何物か善きものあらば、何故に卿等は信仰を有する前に之を望むや、——信仰なる者は凡そまことに善且聖なるもの唯一の根元なるにあらすや。

畢竟するに卿等は罪の赦されたる以前に爲したることも有せるものも皆卿等が赦罪を得るにつきては神に對して何の益をも爲さることを忘れをること何ぞ然く久しきや。されば此事は斷然之を棄てざるべからず、之を蹂躪して復た顧みる可からず、然らざれば卿等は決して神より眷愛を受くることなかるべし。何となれば此眷愛を受くるまでは卿等はたゞ有罪、滅亡、不爲、誤ふるに事なく、神に獻ぐるに物なき罪人にして、卿等を愛し卿等の爲めに身を棄てたる神の愛子のいさをに由るの外之を祈り求むること能はざるものなればなり。

終りに。嗚呼人よ、なんぢはよし何人たるにせよ、自ら死の宣告を有し、自ら拘  
 かれたる罪人と感じ、而して神の怒はなんぢの上に留りをる者なり。主はなんぢに  
 「かくなして」――すべて完全に我誠命を遵奉して、「生さよ」とは宣はすして、「主  
 耶穌を信せよさらばなんぢ救はるべし」といひ給へり。信仰の道はなんぢに近し。  
 今、即時に、ありのままの罪人として福音を信せよ、「われなんぢの不義を恤み其罪  
 と惡とをまた意に記めざればなり」と宣ふなり。

神の國に至る道

「神の國は近けり、爾曹悔改めて福音を信せよ」

馬可一〇十五

此言葉は自然に吾儕を導いて、二つの事を考へしむべし、即ち一は主が最早「近  
 けり」と言ひ、且つ自ら神の國と稱し給ふ眞誠宗教の性質にして、次ぎは神の國に  
 至るの道、即ち主が「爾曹悔改めて福音を信せよ」と云ふ言を以て示し給ふもの是  
 なり。

第一。吾等は先づ主が此所に稱して「神の國」と呼び給ふ眞誠宗教の性質を考へん  
 と欲す。大使徒ポロは羅馬人に送れる書中に同じ言葉を以て、又た主の此言を説  
 明して「神の國は飲食に非ず、唯だ義と和と聖靈とに由れる歡樂にあり」と云へり。  
 「神の國」即ち眞誠宗教は「飲食に非ず」、唯だに改宗せざりし猶太人のみならず、  
 キリストの信仰を受け納れし多の人々は其の信仰するに係はらず「律法に熱心なる

者、實にモーゼの儀式上の律法にすら熱心なる者なりしことは人の能く知る所なり。此故に律法の中に記されしものは素祭にあれ、或は灌祭にあれ、清き肉、或は清からざる肉の區別にあれ、只だに自ら悉く之を守れるのみならず、強いて之を神に歸へりし異邦人(即ち異教人)にも守らしめんとせり、甚しきは至る所の異邦人に教へて「汝等割禮を受け律法を守るに非ずんば救はるべからず」(使十五〇一、廿四)と唱ふる者ありしなり。

使徒は此等の事に反對して此所にも他にも主張して眞誠宗教は飲食にあらす、儀式を守ることに非ず、如何なる外形的の者にも非ず、心外の事物に非ずして全く「聖靈に由れる義と和と歡樂とに在り」と曰へり。

神の國は、如何に貴く勝ぐれし種類のものにせよ儀式禮法の如き外形的の事物にあることなし。假令儀式禮法を以て宜しきに適へる意味あるものとなし、内心を顯はせるものとなすも、又事物の表面より深くは考へざる普通の俗人に助けと成るの

みならず、疑もなく健全なる理性を具ふる人々を助くるものとなすも、特に猶太人に於ては神親ら命じ給へしものとなすも、其命令の猶未だ充分の威嚴を存せし時代にすら眞誠の宗教は主として其中にありしに非ず、否決して少したもあることなし。神親ら命じ給へし儀式禮法にして斯くありとせば、况んや人間が自由に定めし儀式禮法に如何にして眞誠の宗教、即ち神の國あるの理あらんや。キリストの宗教は凡て此の如きものに比較すべからざる程高くして又深きものなり。儀式禮法は眞誠宗教に隨伴する限りは善きものなり。此等は單に人間の弱きを助くる方便として用ゐらるゝものなれば、徒に之を擯斥するは執迷なりと雖も何人も之より奥に入ることを勿れ。人々よ夢にも儀式禮法其物に價値ありと思ふこと勿れ、又は眞誠の宗教は之なくして成り立つたはすと云ふこと勿れ。然らずば儀式、禮法は却て神の惡み給ふ所となるに止まるべければなり。

眞誠の宗教は禮拜法、儀式、典例の外形にも存せざる如く、如何なる外部の行

狀 動作にも存することなし。不徳淫猥の所業をなす者、或は己れ其境界に在れば  
 他人より斯くせらるるを嫌ふ如き事を他人に行ふ所の人に眞誠の宗教存せざるは確  
 かなり。此の如く「善を知りて之を行はざる者」に實際宗教の精神なきことも亦事實  
 なり。されど品行潔くして兼て善事を行ふ所の者にも、往々眞誠の宗教なきこと  
 あり。二人同じく、饑ゑし者に食を與へ、裸かなる者に衣を與ふると雖も、一人  
 には眞の宗教心有りて、一人には少しも無きことあるべし。何となれば一人は神の  
 愛より行ひ、一人は名譽の慾情より行ふべければなり。此の如く眞誠の宗教心は自  
 然に人を導きて、善良なる言行を爲さしむべしと雖も、宗教の眞相は遙かに深く  
 「心の中の隠れたる人」に存するといふとは、燎々として火を觀るよりも明かなり。  
 余は心の内の人と云ふ、何んとなれば眞誠の宗教は正統の信仰或は健全なる理  
 論より成り立つものにあらざればなり。此等は假令外部のものとも稱するは適當なら  
 ずと雖も心に有らずして、單に理性に屬するものなればなり。人は凡ての點に於て

正統の信仰を有し惟だに當然なる意見を抱くのみならず、反對者に向て熱心に之  
 を辯ずることあるも人はキリストの化身に就き、三位一体に就き、神の論の中に含  
 蓄する凡ての他の教義に就き、公明なる思想を有することあるも、使徒、ニケア、  
 アタナシアの三信經を皆な承認することあるも、されども其人に眞の宗教の精神な  
 くして一個の猶太人トルコ人其他の異教人と差別なきことあるべし。人は殆んど悪  
 魔の如く正統の信仰を有しても（全くといはずして、殆んどと云ふは蓋し何人も何  
 事にか誤を免れずと雖も、悪魔に誤解あるべしとは考ふべからざればなり）彼の  
 如く全く敬神の念なきことあるべし。  
 此心の敬神こそ眞の宗教にて、此こそ、神の前に於て價貴きものなれ。パウロ  
 は「義と和と聖靈とに由れる歡樂」の三つを以て此全体を包括せり。  
 第一、義若し我等が彼の二つの誠、則ち主が「凡ての律法と預言者とは」悉く  
 之に據れりと宣へるところのものを記憶せば、此意を了解すること難きに非ず「爾



心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠なり。此れキリストアンの義の第一にして大なるものなり。爾は爾の神エホバに在て喜び、彼に在つて凡の幸福を得ることを得ん。エホバは此世にも永遠までも汝の干櫓となり汝の資は甚大なるべし。汝のすべての骨は言はん「天に於て爾の外誰か依りて頼むべきものあらんや、地の上に爾の外我が望むべきものなし」と。汝は「我子よ汝の心を吾に與へよ」と宣ふ神の言葉を聽き、又其の如く成らん。汝等若し全心全靈を開いて自由に神の支配し給ふまゝに任せば、汝等は心より斯く呼ぶに至らん「エホバわれの方よ、われ切になんぢを愛す、エホバはわが巖、わが城、われをすくふ者、わがよりたのむ神、わが堅固なるいはは、わが盾、わがすくひの角、わがたかき櫓なり」。

第二の誠は此と大に相似たるものにて、實にキリストアン正義の第二の大なるものは、第一の誠と離るべからざる密接の關係を有す。即ち己の如く汝の隣人を愛せよ」と云ふこと是なり。汝は愛せざるべからず、汝は最も柔和なる好意と、最も眞率なる愛情と、凡ての惡を去り出來得る丈の善を行はんとする最も熱心なる望とを以て汝の隣人を愛すべきなり。隣人とは汝の朋友、親戚、知己のみならず徳ある者、或は汝に親しく、或は汝を愛し、汝の親切に酬いる者などの輩のみならずして、人の凡の子、すべての同胞、神の造り給へし、すべての靈、未だ汝の見知らざる者も、汝が姦惡、薄情と認むる所のものも、汝を侮り、汝を困るしむる所の者も、此れらを己の如く愛し、其幸福を願ふ所の變らざる渴望と、一樣に思ひ憐ふことなき親切とを以て、肉体或は心靈に屬ける凡ての憂愁、損傷を除かんとして倦むことなき配慮とを以て、己の如くに愛すべきなり。

此愛こそ「律法を全うし」キリストアン正義、内心の義の全体を概括するものに非ずや。何となれば愛は必然に慈悲、謙遜を含めばなり、(愛は傲らず)、柔和、忍耐を含めばなり、「愛は輕しく怒らず」凡そ事包容み、凡そ事信じ、凡そ事望み、

凡そ事忍べばなり、愛は凡て外に現はるゝ行為の義を含めばなり、それは「愛は隣人を害はざればなり」、愛は人を傷ひ、人を愛ひしむることを好む能はず。すべて人類を愛する所の者は機に従て「すべての人に善を行ひ」、偏頗なく、偽善なく、慈悲と、善業とに充つべければなり。

されども、眞誠の宗教即ち神と人とに對する正善なる心は、聖潔を含む如く、又幸福をも含むなり。何となれば、唯だ「義」のみならずして「聖靈」によれる平和と歡樂に在り」とあればなり。さらば如何なる平和なるか。即ち神のみ獨り與へて、世の奪ひ去るべからざる所謂「神の平和」すべての才智に優り「單純なる合理的の思想」に勝れたる平和是なり、此平和は超自然の感覺「來るべき世の權威」に付いて味ふことなれば、生來のまゝなる人は如何に此世の事に賢くありとも知るべきものに非らず、又其現在の儘にては到底知り得べきものにあらす、「蓋し靈に由りて辨ふべき者なるが故なり」。これすべての曖昧と、すべての悲しむべき疑惑とを除き去る所の平和

和なり。蓋し聖靈は信者の靈と共に其「神の一箇の子」たることを説すればなり。此平和は苦痛を有つところのすべての恐懼、神の怒の懼、陰府の懼、惡魔の懼、特に死の懼を除くべし。心に神の平和を有する所の者は神の聖旨を信じて却て「世を逝りてキリストと共に有らんことを願へばなり」。

此神の平和の存する靈には又「聖靈」に由れる歡樂あり、即ち遠へに貴き神の靈が心に働ける所の歡樂なり「我儕に和を得させ給ひしキリスト、イエスに頼り」彼の神に於ける平和謙遜の歡びを我儕に與ふるものは、此聖靈なり、詩人ダビデ王が「その愆をゆるされ、その罪をおはわれしものは福なり」と歌ひし眞理を我儕に確かむることを得せしむるものは此聖靈なり。キリストを信する者は神の子なりといふ聖靈の證より生ずる所の靜かにして確かなる歡びを鼓吹し、神の榮光を望んで、則ち其或部分は信者自らの中に現はされ、後には十分現はさるべき神の榮光ある像を見んことと、信者の爲めに天に備へ置かれたる榮の冕とを望む所の言ひがたき

喜とを與ふるものは此聖靈なり。

此聖淨と幸福と一つに合体したるものを、聖書に於て、(本文に我儕の主が宣へし如く)「神の國」といひ、又「天國」といふことあり。神、人の靈の中に直接に支配し給ふ結果なれば斯く神の國と名づけられしなり。神其大なる權を以て我儕の心の中に支配を始め給へば我儕の心中は當さに、直ちに「義と和と聖靈とに由れる歡樂」を以て充つるに至るべし。天、人の心の中に開かれたれば又斯く天國と名づく。蓋し心中此天國を味ふものは、誰にても天使と人の前に揚言して、

「遠への生命は獲られ、

神の榮は世に照り始めり、

どうたふことを得ん。聖書は一定不動の意味を以て各所に證して「神は窮りなき生命をもて我儕に賜ふ、此生命は乃ちその子に在り、神の子をもつ者は生命をもち、その子を有たざる者は生命を有たず」と言へり。そは約翰傳に「永生とは唯一人の

眞神なる爾と其遣はし、イエス、キリストとを知る是なり」とあればなり。此生命を有つところの者はたとひ如何なる烈しき艱難、窮厄の中にも、靜かなる信仰をもて、斯く神に語ることを得ん、

「御力もてとこしへに安けき主よ。われらはエホバなる神の子にしまして、人のすがたも、天下りし爾をあがめまつらん。

讚のうたは、とこしへに爾にあれ、己れらは天の如くに、此世にて爾の寶座をはめたくへん。みすがたをあらはし玉ふところはいつこも天にてあればなり」と。

而して此「天國は近けり」とキリストの初めて之を宣言し給へる時は神「肉に於て現はれ」給ふて人の中に、其民の心の中に王國を建てんとする時、満てりといふ意味を含みしなり。此時は今や十分満てるに非ずや、何となればキリストは曾て「見よ夫れ我は世の末まで常に爾曹」我名を以て罪の赦を宣へ傳ふる爾曹」と偕に在るなり」と言ひ給へばなり。此故にキリストの福音の宣へ傳へらるる所には、いつく

にも、天國は近けるなり。天國は汝等銘々より遠からず。爾曹悔改めて福音を信ぜよ」といふキリストの御聲を聽きて其如くせば、今といふ此時天國に入ることを得べきなり。

第二、以上述べしものは即ち道なり。人々よ此道を行け。先づ悔改むべし。悔改むとは己を知ることなり。此れ信仰に先だつ所の第一の悔改にして、即ち自ら罪あるを確知することは是なり。さらば、爾眠れる者は目を醒ませ。己れは罪人なることと、又己は如何なる罪人なるかを知れ、爾の内なる性質の腐されて、爲めに如何に本來の義より遠ざかりて「神の律法に服はず又服ふこと能はざるか」「神の心に適はざるか」「肉の事を念ふ」かを知れ。爾の靈と諸能力、諸官能とは一つとして汚れ或は腐れざるものなく、其土臺の根底より朽敗してあることを知れ。爾の理性の目は昏んで、神の認め、神の事を辨ふこと能はず。無知、謬見の妖雲は爾の頭上に止まりて、死の蔭を以て爾を蔽ひつゝあるを見ざるか。爾は知るべき善なるに未だ神も、

世も、己をも知らざるなり。爾の意志は神の意に背き、曲りて邪となり、すべての善事即ち神の愛し給ふすべての事を嫌ふて、惡事即ち神の忌み給ふすべての事を愛する程罪惡の貫盈するを認めざるか。爾の願も、嫌も、爾の喜びも、悲しみも、爾の望も、懼も、悉く正しきに外れ、神意に反く故に汝の靈には全き所なく彼の預言者の強き言葉にて之を形容せば「足のうちより頭にいたるまで全きところなく、たゞ創痕と打傷と腫物とのみなり」。

汝の生來の心、汝の心底は實に此の如く腐敗せるなり。此の如き心の根より如何なる枝の生ずべしと思ふや、汝は不信仰にして活ける神を離れて「わが仕ふべき主は誰なるか、黙せよ、神はわが仕ふるも仕へざるも關せざるべし。」と言ふ如きが事も、或は高慢なる獨立心を起して至と高き神に擬することも、或は驕傲を恣にして「我は富み且つ豊かなり、乏しきところなし」と言ふが如き事も、凡て此腐敗したる心根より生ずる枝たるなり。彼の虚榮、名譽の渴望、野心、貪欲、肉体の